

ヘーゲル「教授資格討論テーゼ Praemissae theses」

——「イエーナ期」ヘーゲル哲学の内発的位相——

福田 静 夫

はじめに ヘーゲル哲学の「イエーナ期」

ヘーゲル哲学は、周知のように、1810年代末から31年の死に至るまでのヘーゲルの晩年のいわゆる「ベルリン期」において、ドイツ古典哲学の頂点に立つのだが、その本来の出発点になっているのは、1801年にイエーナ大学の私講師となってから、07年の『精神現象学』の出版をもって画されるまでの「イエーナ期」であった。ヘーゲルは、1799年1月にヴュルテンブルク公国財務局書記官であった父を亡くして、その遺産のほぼ三分の一を相続することで、ベルンのシュタイガー家、フランクフルトにおけるゴーゲル家と、チュービンゲン大学卒業以来6年続いた家庭教師という鬱屈した地位によろやく切りをつけ、しばらくは自立して生活できる見通しがついた。そして、1801年1月、チュービンゲン時代の後輩シェリングの勧めでイエーナに居を移して、同じイエーナ大学に不安定な身分ながら教職を求めすることに決心したのであった。

このヘーゲルにとっての「イエーナ期」の思想史的な状況を、ここではまず概観しておくことにしよう。

イエーナ大学の哲学の講壇は、1787年以来、そこでラインホルトがカント哲学を紹介し始めることで、その名を知られるようになっていた。89年には、シラーがゲーテに招かれて哲学教授に就任、「世界史入門」の講義を担当し、著名な『ドン・カルロス』、『オランダ独立史』を著者自身が担当する講義には、大挙して学生が押しかけることになった。そして94年には、ラインホルトの後任として、ゲーテの推薦によって、フィヒテが就任することになって、哲学の講壇の知名度はさらに上がった。フィヒテは、すでにフランス革命のさなかの92年、カントの著作と思われた『あらゆる啓示の批判の試み』を出したことで注目され、翌93年には、『領主からの思想の自由の返還要求』、『フランス革命についての公衆の判断を正すために』などによって、反封建・啓蒙・民主主義の立場をはっきりさせることで新しいドイツ哲学の時代に挑戦していたが、大学就任の年には、公開講義の主題に「学者の使命」を選んで、その講義は盛況を極めたし、また「全知識学の基礎」の講義を始めて、これはやがて初期フィヒテの主著としてまとめられる

ことになる。

だがそのフィヒテは、99 年、「無神論論争」を仕掛けられて、多くの学生の支持を受けていたにもかかわらず、教権の圧力によって大学を去ることを余儀なくされた。けれども、その前年の 98 年、弱冠 25 歳、新進気鋭のシェリングがすでにイエーナ大学で哲学を教え始めていた。フィヒテの解雇を決定する際に、ゲーテの言葉として、「一つの星が沈み、別の星が昇る」と述べたことが伝えられている。シェリングは、チュービンゲン大学の学生時代に熱烈なフィヒテ学徒となり、1795 年には、フィヒテ哲学の立場に立って、「哲学の原理としての自我について、あるいは人間知における無制約者についての哲学的書簡」などの論文を発表したが、96 年に書いた「自然哲学の理念」によってフィヒテの「自我」の立場から「自然哲学」の立場に転回、それがゲーテの共感を得ることになって、イエーナ大学に招聘されたのであった。98 年の冬学期にシェリングは、「自然哲学の本質について」と「自然哲学の体系」を講義し、カント哲学とフィヒテ哲学とを批判するその新しい哲学の動向は、はやくも大きな注目を浴びることになる。以後、シェリングは、つぎつぎと独自の「自然哲学」や「先験的観念論」の問題作を発表していくことになるが、そのシェリングの力を借りながら、ヘーゲルはいわばシェリングの哲学的な協力者として、その「イエーナ期」の最初の一步を踏み出すことになったのである。

ヘーゲルは、イエーナでの最初の年の 1801 年 7 月に論文『フィヒテの哲学体系とシェリングの哲学体系との差異』（以下『差異』論文と略称）を書き上げて、8 月半ばに、教授資格出願の承認を求める参考文献としてそれをイエーナ大学に提出し、「俊敏な哲学者」であるという教授ウルリッヒの評価を得ていた¹。そして 8 月 18 日から 22 日にかけてラテン語で 12 条の「教授資格討論テーゼ Praemissae theses」を急いで書き上げて印刷し、8 月 27 日、それに基づいて討論 Disputation がおこなわれたが、この日は、たいていの伝記が記しているように、彼のちょうど 31 歳の誕生日であった²。テーゼを擁護する側には、彼自身と並んで、シェリングの弟のカール・シェリングともう一人の学生が座り、反論側には彼の大学時代以来の親友である神学のニートハンマーの他に、この討論会の影のプロモーターだったシェリングが並んだ。この討論の形式は定められた手続きに従ったものだったが、その具体的な内容は分かっていない。もう一つの手続き要件である哲学教授資格請求論文 Dissertatio philosophica としては、彼は、上の『差異』論文ではなくて、別に書いた論文『惑星軌道論 De orbitis planetarum』を提出した。その教授資格の決定に際しては、資格請求論文の提出の後れなどいくつかのいざこざを生んだが、ともあれ手続きは完了して、ヘーゲルは、10 月の冬学期から、わずかの学生の受講料に生活を依存した私講師としての不安定な教職を得ることができるようになった。その際、彼には、シェリングやニートハンマー、パウルスなど、かつてのチュービンゲン神学校時代の友人が同僚にいたことや、シェリングを介して、ワイマール公国の宰相で文豪のゲーテと相識になっていたことが大きな支えになった³。

不安定な立場ながらも私講師の職を得たことで、ヘーゲルの活動は、堰を切ったように活発になる。講義では、最初の年度の冬学期に「論理学および形而上学」を題目に取り上げて、その後

の講義の基調となる方向を提示することになる他、シェリングと共同で『哲学批判雑誌』の編集を引き受けて、約2年間にわたって、その主要な論文・批評・雑報——そのなかには「懐疑主義の哲学への関係」、「信と知」、「自然法の学的な取り扱い方について」などの重要なものがある——を書き継ぎ、『ドイツ憲法論』、『人倫の体系』などの論稿をまとめる。けれどもこの旺盛な活動を続けるなかで、シェリングとの哲学的な立場の違いがしだいに目立つようになるが、折しもシェリングは、1803年に、イエーナ・ロマン派のなかで交流を深めたシュレーゲルの妻カロリーネと共に、ベルツブルクへ教授として去っていく。イエーナ・ロマン派は、その国粹主義的な傾向をゲーテに嫌われるようになっていたことに加え、フィヒテについてその内紛がらみでまたシェリングを失うことで、大学に結びついていたイエーナ・ロマン派の活動が急速に衰退に向かっていった。ヘーゲルの最も信頼するニートハンマーも新興のバンベルクに移るなど、イエーナ大学そのもののかつての名声は急速に傾きはじめていくが、そのなかでかえってヘーゲルは、自分の哲学の体系的な構築へ向けて、いっそう大きな努力を払い続けていく。

ヘーゲルの講義の題目を見ても、1803-04年の冬学期頃から、「論理学/形而上学」の他に、「自然哲学」、「精神哲学」を含めることで、その哲学の体系構想はしだいに明確なものになり、ヘーゲル哲学の将来的な骨格が形を整えはじめる。その一方でヘーゲルは、05年になってようやく員外教授に加えられ、翌06年には、ゲーテの配慮があって、一定の給料を支給される正教授になるが、生活の苦しさは相変わらずであった。05-06年の冬学期には、「自然哲学」と「精神哲学」を「実在哲学 Realphilosophie」として取り上げるとともに、「哲学史」の講義や「数学」の講義をおこなって、その哲学の視野を現実の社会や歴史や自然科学のうちに広げることで、哲学を文字通りの世界観としてとらえるようになっていく。そして06年10月からの冬学期のために、自著による『精神現象学』の講義を予告する。この著作は、自分のそのような新しい世界観的な哲学のための第一部となる構想を担い、さしあたりの「イエーナ期」を理論的に締めくくって自分の新しい哲学へ向けての出発点を形成することになるものであったが、そのような学問的な名分とは別に、その出版によって生活の資を補わなければならないというのびきならない生活上の動機を背景にもっていた。ところが折悪しく、その06年の10月7日、フランスがプロイセンに宣戦布告、13日には、ナポレオンがイエーナを占領するという事態が突発する。ヘーゲルは、バンベルクに戦火を避けて翌07年春に「序言」を書き上げ、友人ニートハンマーの援助を得ることで、ともかくも4月に「学の体系第一巻」として『精神現象学』を出版できた。けれども戦火に見舞われたイエーナでは、大学は閉校になったために、ヘーゲルはやむなくバンベルクで、当面『バンベルク新聞』の編集に携わることになる。

こうして、かつてヘーゲルのチュービンゲン神学校時代に「自由の木」を植えて祝福したという伝説のあるフランス革命の余波が、ナポレオンという「世界精神」とのイエーナでの偶然の出会いをもたらした歴史的な時点で、『精神現象学』の出版という彼の哲学の生誕を告げる哲学書が出版されることをもって、7年間にわたる「イエーナ期」は閉じることになる。とりわけ『精神現象学』の場合には、フランス革命の影響下で、世界史上最初の植民地の独立革命が、仏

領のハイチにおいて奴隷自身の手によって達成されたことを深刻に読み込んでいた⁴ことによっても、この「イエーナ期」は、また彼の哲学にとっての新しい世界史の「日の出」の時ともなった。バンベルクで「新聞」に携わって間もない1808年、ヘーゲルは、ニートハンマーの援助で、ニュールンベルクのメランヒトン高等学校の校長に就任する。この「ニュールンベルク期」には、カトリックとプロテスタントとの宗教対立や、給料の遅配に悩まされながらも、12年から13年にかけて、主著の一つである『論理学』をまとめている。16年には、ハイデルベルク大学へ移り、翌年には、年来の体系構想が『エンチュクロペディー』として結実し、彼の「哲学」は次第にその相貌を明らかなものにしていくのである。

ところがこの「ハイデルベルク」期（1816 - 18年）の後半は、フランス革命の影響下に「啓蒙」から「自由」への方向を辿りはじめたそれまでの世紀初頭の諸時期とは逆に、ヨーロッパとドイツでは、「復古」の時代を記す諸事件に満ちている。14年から15年へかけてのナポレオンの没落とブルボン王朝の復活、ウィーン会議によるドイツの国家統一の先送り、とくに19年のドイツ連邦議会における「カルルスパート決議」など。ドイツでは、民衆の自由とドイツの統一とを求める「ドイツ学生組合運動 Burschenschaft」は解散させられ、出版物に対する検閲や大学の国家統制が強化される。ヘーゲルは、このような歴史の逆流する状況のなかで、18年の末にベルリン大学へ移り、その「ベルリン期」を送ることになる。20年末には、この時期を代表する『法哲学』を出版、30年には、フランスの7月革命を契機にして「王政復古」と「ウィーン体制」の時代が崩壊していくのを感じながら、「英国選挙法改正案」を執筆するが、国王によって発表を禁止される。31年に、あらためて『精神現象学』の校訂に取りかかったところで、10月、コレラによってその生涯を閉じる。

「イエーナ期」以降のヘーゲルとその哲学がたどるこのような曲折した運命の背景には、フランス革命とその影響下で大きく塗り替えられていくドイツの歴史があった。ここで取り上げる「イエーナ期」に限っても、1803年以来、フランスの要求に従って、かつての300にのぼる領邦は40の単位の領域に再編成され、帝国諸身分の廃止、聖界諸侯領の没収がおこなわれていった。西南ドイツの諸侯は、ライン連邦を結成して、フランス皇帝の保護下に入ったし、06年8月6日には、「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」皇帝は退位して、帝国は法的にも消滅していた。そしてこの年10月、ヘーゲルが『精神現象学』を書き上げるなかで遭遇したフランスによるイエーナ占領は、ティルジットにおいてのプロイセンの大敗とともに、翌07年7月、ティルジットの講和条約によって、ナポレオンの弟のジェロームが支配するヴェストファーレン王国にエルベ川以西の地域を委ね、ドイツの領域はエルベ川以東に限られるという事態を生むことになった。

ナポレオンに屈したプロイセンでは、この07年10月、シュタインが首席大臣に就任し、いわゆる「10月勅令」による「体僕」制の廃止に始まって、封建的な諸制度に対する大きな内政の改革が進み、「ドイツはもう国家ではない」（ヘーゲル「ドイツ憲法論」）といわれた国家分裂状況を越えて、国家的統一に向かう新しいドイツの歴史的展望がようやく開かれようとする。シュタインの後を継いでハルデンベルクは、ナポレオンの支配としばしば対立しながら、さらに中央

集権的政策を進め、10年には、教会領の世俗化、ギルド制の廃止、農奴解放を断行し、12年にはユダヤ人解放令を出す。こうしたシュタイン・ハルデンベルクの社会改革を受けて、フンボルトがさらに国民的な教育改革に着手し、「ドイツ観念論哲学」を基礎にした教養大学創立の構想をドイツ全域に推し及ぼす。10年に創設されたベルリン大学へは、フランス占領下のベルリンで「ドイツ国民に告ぐ」という連続講演をおこなったフィヒテが教授に招かれて哲学部長となり、翌年には総長に就任する。そしてナポレオンの支配から解放された「王政復古」後の1820年代には、プロシヤがしだいにドイツの事実上の統一の中心となっていくが、その首都ベルリンの大学では、ヘーゲルがフィヒテ亡き後の哲学教授の席を襲い、あらためてヘーゲル哲学とドイツ近代国家との関係が問われるなかで、ドイツとヨーロッパはまた1930年以降の新しい歴史的な転換の時代に入ることになるのだが、ここに話しが及ぶのは、当面の課題を大きく越えることになってしまうだろう。

「教授資格討論テーゼ」

ヘーゲル哲学は、以上に見てきたように、たんにドイツの近代の歴史にとってのみならず、フランス革命とその後のヨーロッパ近代のそれにおいても不可欠な文化的地位を占めている。この地位はまた、「ドイツ古典哲学」を完成したのものとしても評価されるヘーゲル哲学に特有な哲学的達成と切り離すことができない。1801年から1807年にかけてのヘーゲルの「イエーナ期」は、その特別にドイツの哲学史的な意味において、『精神現象学』の成立に端的に要約されるような「学」としてのヘーゲル哲学体系の構想が成立していく時期であった。そしてそれは、『差異』論文に見るように、フィヒテ哲学との「差異」を際立たせていくシェリング哲学に対して、さらに両者をとおしてそれぞれの前提とするカントに対しても、ヘーゲル哲学そのものの「原理」的な独自性を決定的に際立たせていく過程であった。

もっともその後、「学の体系第一巻」とされた『精神現象学』に続いて「学の体系第二巻」は出されることはなく、「ニュールンベルク期」以降、『論理学』が「学」の第一部とされ、『エンチュクロペディー』で「論理学」・「自然哲学」・「精神哲学」でもって「体系」が完結したのとして示されることで、「精神現象学」の「学的」・「体系」的な位置については、あらためて論議されなければならない多くの問題が残されていたことが明らかになっていく。そのかぎり、「イエーナ期」におけるヘーゲル哲学の学的形成は、「原理」的な側面と「学的」・「体系」的な側面において、まだ初発的な局面に立っていたと言わざるをえないであろう。

ここでの課題は、この初発的な局面という視点から、イエーナにおけるヘーゲルの哲学活動の出発点を画する「教授資格討論テーゼ Praemissae theses」（以下、「討論テーゼ」と略称）を取り上げ、それがどのような位相をもっていたのか、あらためて問うてみることである。「教授資格論文」として提出されたのは『惑星軌道論』であるが、これは「討論テーゼ」よりもかなり後れて提出されたもので、直接の資格審査の論議の対象になっていないのに対して、後者は、直接に資格を認めるか否かの前提に関わって討論の対象とされたし、また前者に直接に関わるテーゼ

に限られないより広範な論点を多く含んでいたからである。

この「討論テーゼ」を重視して、テーゼの各条にわたって、それぞれの理論的な特徴に立ち入った検討を加えているのは、ローゼンクランツである。それによれば、十二の「テーゼの順序」には一定のつながりがあり、最初に「論理的なテーゼ」(第一, 第二テーゼ), 次に「自然哲学的なテーゼ」(第三, 四, 五テーゼ), 続いて「哲学一般の概念に関する批判的なテーゼ」(第六, 七, テーゼ)があり, 最後に「実践哲学的なテーゼ」(第九, 十, 十一, 十二テーゼ)がある。

ヘーゲルの十二の「討論テーゼ」は、以下の通りである。

第一条 *Contradictio est regula veri, non contradictio, falsi.*

矛盾は、真なるものの規則、無矛盾は偽なるものの規則である。

第二条 *Syllogismus est principium Idealismi.*

三段論法推論は、イデアリスムスの原理である。

第三条 *Quadratum est lex naturae, triangulum, mentis.*

四角形は自然の法則、三角形は精神の法則である。

第四条 *In Arithmetica vera nec additioni nisi unitatis ad dyadem, nec subtractioni nisi dyadis a triade, neque triadi ut summae, neque unitati ut differentiae est locus.*

現実の算数においては、加算でおこなうことは、一番目の数を二番目の数に加えること、減算では、三番目の数から二番目の数を差し引くことに他ならない。また三番目の数が和、一番目の数が差に他ならない。

第五条 *Ut magnes est vectis naturalis, ita gravitatio planetarum in solem, pendulum naturale.*

磁石が自然の槓桿 / 推進力となるので、その結果また、太陽に対する惑星の重力は自然の振り子となる。

第六条 *Idea est synthesis infiniti et finiti, et philosophia omnis est in ideis.*

理念 Idea は無限と有限との総合であり、すべての哲学はもろもろの理念からなる。

第七条 *Philosophia critica caret Ideis, et imperfecta est Scepticismi forma.*

批判哲学は理念を欠いているので、スケプシス主義の不完全な形式となる。

第八条 *Materia postulati rationis, quod philosophia critica exhibet, eam ipsam philosophiam destruit, et principium est Spinozismi.*

物質は、批判哲学のものであることで明らかのように、理性によって要請されながら、批判哲学そのものを破産させて、スピノザ主義の原理 / 出発点となる。

第九条 *Status naturae non est injustus, et eam ob causam ex illo exeundum.*

自然状態とは、不正義なものではないが、まさにその理由ゆえにこそ、そこから脱出するべきものである。

第十条 *Principium scientiae moralis est reverentia fato habenda.*

人倫の学の原理 / 出発点は、運命に対する畏敬の念をいだくことである。

第十一条 Virtus innocentiam tum agendi tum patiendi excludit.

人間の徳性 Virtus とは、働きかけることにも、働きかけられることにも、けっして無罪責の余地を残さないことである。

第十二条 Moralitas omnibus numeris absoluta virtuti repugnat.

無制限に絶対的であることを求める人倫性は、人間の卓越した徳性には背を向けるものである⁵。

ローゼンクランツの特徴づけからもわかるように、こうしてヘーゲルが提起している一連の「討論テーゼ」は、彼が別に準備している自然哲学的な「教授資格論文」の範囲に内容を限ったものではないことを容易に推測させるであろう。しかも各テーゼのいずれもが、かならずしも簡単な推測を許さないラテン語とその独特な文体で作成されていて、ラテン語での討論の場において、提題者の卓越性に資することを要求されているのだから、そのうちにはヘーゲル哲学のこれからを考える上で、かぎりなく多くの示唆を含んでいるはずである。

ここでは、紙幅の制限もあるので、これら諸テーゼのうち、「教授資格論文」に関連する「論理的なテーゼ」（第一、第二テーゼ）と「自然哲学的なテーゼ」（第三、四、五テーゼ）を取り上げて、そこから彼の哲学の草創期である「イエーナ期」に独自の位相のいくつかを開き出すことに課題を限ることにしたい。

第一条の「矛盾」の特徴づけ

第一条 Contradictio est regula veri, non contradictio, falsi.

矛盾は、真なるものの規則、無矛盾は偽なるものの規則である。

(1) 「矛盾」とその定型的な理解

ローゼンクランツによれば、この第一条は「論理的テーゼ」に属しており、その「矛盾」の規定によって、かつてヘーゲルがイエーナ大学で学んだヴォルフ（1679-1754）の形式論理的な矛盾概念に向けられた批判になっている。ただし、ヴォルフもいうように、「真なるもの」とは「自分自身に等しい」という「同一律」に立ち、「自分自身に矛盾する諸概念は真ならざるものでなくてはならない」という「矛盾律」の正しさを守ることに、ヘーゲル自身が異を唱えたわけではない。ただその説明に停滞することが誤りである、と反駁したのだという。なぜなら、ヘーゲルの立場から見れば、「自分自身と等しいことにおいて、同時に自分の対立者でもある」ものがいわれているはずであるし、そもそも「真なるものとは、矛盾なくしてあるようなものではない。しかし真なるもの自体は同時にその否定の積極的な否定でもある」。例えば、白色は、黒色において矛盾をもち、黒色を否定する矛盾において、白色なのである。また「機械的な自然の領域のなかでさえ、求心力と遠心力との矛盾が物体のなかで止揚されている」⁶。

こうしてローゼンクランツは、一方では、この「矛盾」テーゼによって、あたかもヘーゲルが

形式論理的な「矛盾」のことを知らないかのようにヘーゲルを理解するなら、それはヘーゲルに「非条理を誣める」ことになるといい、他方では、ヘーゲルのこの「矛盾」観が、カントの『純粹理性批判』のなかにあるカントの「弁証論」によって、ヴォルフ的な形式的思考法則を越えさせられたものである、と説明する。つまり、ヘーゲルのこの「矛盾」テーゼは、形式論理的な「同一律」・「矛盾律」を越えたものではあっても、それを侵犯するものではないとして、その弁証法的「矛盾」の論理的性格を正当化しているわけである。

中埜肇は、このローゼンクランツのいうカント「弁証論」を徹底する方向でのヘーゲルの「矛盾」テーゼを理解しているものとして、H.グロックナー（1896-1979）の見解を引いている。カントが、「絶対者」の認識に「理性」が向かう時には不可避的に「アンティノミー」、つまり二律背反的な論理的「矛盾」に巻き込まれるから、「認識に限界」を設けるべきだとするのに対して、ヘーゲルは、「真の認識は絶対者のそれであるから、必然的な契機として矛盾を自分のなかに含む」、とする。「だからヘーゲルのテーゼはけっして矛盾を恐れる必要がないという意味に解せられる」⁷ というのである。

カント哲学の形式的「矛盾」の否定的機能に対して、現実的な「矛盾」の肯定的機能を承認して、カント的・形式的な限界を乗り越えるというこの視点には、カントがアンティノミーとしての「矛盾」の不可避性をつつき出すことになったのが、「絶対者」の認識を問題にする次元でのことであったというもう一つの重要な論点が潜んでいたはずである。ここでは、グロックナーを引いている中埜自身もこの論点に立ち入ることはしていないけれども、すでにそのことが、形式論理的「矛盾」に対する弁証法的な「矛盾」という定型的説明だけでは完結しない「矛盾」テーゼの奥深さを垣間見させることになっているわけである。

(2) 「矛盾」と「生命活動」の視点

金子武蔵は、ラッソが「弁証法の大胆なる宣言」があるとする「イェーナ期」直前のヘーゲル「体系断片」（1800年）のなかに、「生命とは結合と非結合との結合である」とか、「総合と反定立との結合」であるとかという「矛盾」の用例を指摘したり、後の『大論理学』（1816～17年）のなかの「矛盾はあらゆる運動と生き生きさとの根である」という用例⁸に触れている。金子の「矛盾」の理解には、「物」が多くの性質をもつので、「一にして同時に多」であることとも説明するような場合も見られるが、ヘーゲルの「体系断片」を取り上げることで、ヘーゲルの「矛盾」についての一般的定型の事例という範囲を超えて、実は、「生命／生活」の次元における本質的内在的な「矛盾」の運動形態という次元に、足を踏み入れるわけである。そのことをはっきりさせるためには、ヘーゲルが「体系断片」で問題にしていたのは、「生命」の一般的特徴であるよりももっと特殊な「矛盾」であったことに注意すればよい。そこでヘーゲルは、「人間 ein Mensch というものは、もろもろの個人的な生命活動 die individuellen Leben のあらゆるエレメント、あらゆる無限性を自分の外部に、自分とは別のものとしているかぎり、個人的な生命活動をするものである」⁹ という言葉を残しているのである。こうした言葉によって端的に表現さ

れていることは、「個人の生命活動」は、「自然」や「社会」における「あらゆる無限性」との全体的な結びつきなしには存在しえない、という「全体性」との関わりにおける「矛盾」の認識であり、こうして「矛盾」は「全体性」との関わりを通じて、「絶対者」との連関のなかに立つことになる。

この「個人的な生命活動」と「外的」な「全体性」との「矛盾」認識は、さらにさかのぼれば、「ドイツ観念論の最古の体系プログラム」(1796ないし1797年)という通称において知られている論文のなかで、すでに初歩的な「学」の複合的な「体系構想」をはらんでいたことを証示するはずである。この構想においては、まず、おそらくは『純粹理性批判』を念頭においてのことであろうが、カントにおいては、「全形而上学は、将来、倫理道德 die Moral に帰着する」から、「倫理学はあらゆる理念の完璧な体系である以外の何物でもありえない」¹⁰とされている。つまりカントにあっては、経験を無視して純粹概念による認識だけで成立する「全形而上学」は、その内部に「存在学」、「理性的自然学」、「理性的宇宙論」、「理性的神学」の四部門を含みつつ、人間の「理性」の究極目的を「自由」の意志の実現におく「道德」の哲学・「倫理学」とともに、同一の「体系」を構成しなければならない。そしてその「学」の「体系」の内的な仕上げの過程において、「世界は、一つの道德的生命存在にとって如何なる状態にあるべきであるか」、という問題を立てざるをえない、というのである。けれども、ヘーゲルにとっての問題は、さらに先にある。「道德的生命存在」にとっての現実的な「世界」を問題にし、「哲学がもろもろの理念、経験、データのことを述べるときには、われわれは、結局、大量の物理学的成果を手にする」ことになるが、「今日の物理学は、われわれの精神がそうあり、またそうあるべきほどにも創造的な精神を満足させることができている」。そこで「自然哲学」が要請されることになるが、その「自然哲学」は当然に人間の生命活動を問題にし、「人間性の歴史」的な原理として、「国家、憲法体制、統治、立法」などに至るが、こうした「あわれな人工装置全体 das ganze elende Menschenwerk」の表皮を剥ぎ取って、「あらゆる精神的存在の絶対的自由」が「人間の歴史のための原理」となり、「神とか不死とかの道德的な理念を自分の外部に求めないでもすむ」¹¹ようにしたい、とヘーゲルはいうのである。ここで、「あらゆる精神的存在の絶対的自由」という言葉が、人間の本性から発する自然権として掲げられたフランス革命期の「人権宣言」のなかの「自由」をドイツ哲学的に表現したものであることは明らかであろう。こうして、カント哲学の「形而上学的」な必然的な帰結として提起される現状と課題の認識に立って、この「体系プログラム」が結論として引き出しているのは、人民 Volk と哲学という二つの対立したものの一体化の主張であった。「……啓蒙された者と啓蒙されていない者とは、たがいに手を差し伸べあわなければならない、神話・伝説的な語りは哲学的な語りとなり、人民は理性的にならなければならない。そして哲学は、民間説話的なものとなるためには、哲学を感性的なものとするを避けて通ることができない。こうして、われわれのうちには、恒久的な一体性が支配することになる」¹²。ここで「人民 Volk」と訳した言葉は、現実的には「ドイツ」という「国民国家」はまだ未形成であったけれども、「国民」という含意をもたされているのだが、この「最古の体系プログラム」は、ドイツの古典

哲学の歴史のなかで、「哲学」が「人民／国民」との一体性をはっきりと表明したほとんど唯一の場所であり、その「一体性」を表現する秘密の言葉が、実は「絶対的なもの／絶対者 das Absolute」であったのである。なお、ここで主張されている「哲学」の「感性」化の方向性は、『精神現象学』においてヘーゲルが実行することになる。

(3) 「矛盾」と「哲学体系」の差異化

ヘーゲルの「矛盾」の理論が、すでに「イェーナ期」以前に、「生命／生命活動 Leben」の概念と結びつくことで、このような人間の全体的な自由の「学」と「体系」の構想を内的に成熟させてきたことを見てきたが、その上であらためて、ヘーゲルが「教授資格」の審査請求に先立って書いた論文『フィヒテ哲学の体系とシェリング哲学の体系との差異について』のことを考えてみる必要がある。

この論文でヘーゲルが主題としているのは、すでに論題からも明らかのように、フィヒテとシェリングそれぞれの「哲学体系」の差異を明らかにすることである。その差異化のためにヘーゲルが直接の論点に押し出しているのは、シェリング『超越論的観念論の体系』（1800年）の「緒論」で提出されていた「主観と客観との同一性」という「矛盾」の位相の差異問題であった。そのように「矛盾」がフィヒテやシェリングとに通底する問題とされている事情が現存していたことは、第一の「矛盾」テーゼが、単純にヘーゲル哲学だけに固有の問題ではなかったということを意味していた。

シェリングはいう——「あらゆる知は、客観的なものと主観的なものとの一致 Übereinstimmung」である。「いっさいの純粋に客観的なもの全体を自然 Natur」、「いっさいの主観的なものを自我 Ichあるいは知性 Intelligenz」と呼ぶとすれば、どの「知 Wissen」においても、これら両つのももの「相互的な出会い ein wechselseitiges Treffen」が必然的でなければならない¹³。そのような「同一性 Identität」には、二つの場合だけが可能である。「客観的なものを第一のもの」にして、「それと一致する主観的なものがそれに付け加わる」のか、それとも「主観的なものを第一のもの」として、「それと一致する客観的なものが付け加わる」¹⁴のか。この「主観 - 客観」の位相の違いは、フィヒテとシェリングとの間の往復書簡のなかで両者の立場の差異を顕在化しつつあったもの¹⁵だが、ヘーゲルは前者をシェリングの「客観的な主観 - 客観」の原理、後者をフィヒテの「主観的な主観 - 客観」の立場として、両者をさらに一つの「矛盾」としてその解決の課題を提示し、自分の哲学にもう一つの総体的な立場を確保して見せたのであった。

こうしてヘーゲルは、一方では、フィヒテとシェリングとの「哲学体系」の原理的な差異を表面化させることで、それを両者それぞれと自分みずからの自覚にもたらしただけではなかった。他方では、両者の「差異」を認めないラインホルトが、「それ自身で端的に真実で確実なものは哲学から独立している」¹⁶として、カント主義的な「悟性」認識の不可知論の限界に止まり続けようとしていることを批判して、認識の実在性と学的な体系性との一体性を可能にする「理性」の立場を対抗させたのであった。この意味でヘーゲルの『差異』論文は、カント、フィヒテ、シェ

リングと引き続いていく「ドイツ古典哲学の発展」の原理的分界の基本的な構図を素描し、自分の「哲学」の立ち位置の独自性を自己確認するものとなっていたのである¹⁷。

この場合注意しておいてよいことは、ここで「主観と客観との同一性 die Identität des Subjekts und Objekts」として定式化された「矛盾」の展開過程がまた、後にエンゲルスによって「哲学の根本問題」¹⁸と呼ばれる問題の帰趨を、集中的に表現するものとなっていることである。

カントは、『純粹理性批判』に取り組むに先立って、スエーデンの視霊者スエーデンボルクの語る「霊界」とヴォルフやクルージウスの主張する「思想的世界の空中樓閣」の夢想とを、「感覚の夢想」と「理性の夢想」として対比しながら、批判を試みているが、そこでは、カントはこうした「夢想」全体に対する批判的立場を提起できないで終わる。カントは、「霊」とか「不死」とかに関わって、その存在の可能性を否定しない——「私は生きている主体としての私の内部に諸変化、すなわち思想、選択意志等々を認識する、そしてこれらの諸規定は、総括して物体に関する私の概念をなすところの一切とは別の種類の物であるから、私は正当に非物体的かつ自足的な存在者を思考する。」またこの内的な世界の抽象的存在が、「物質」的「自然」的な世界と如何なる関係にあるのかは、判らないという——「この存在者が身体と結合しないでも思考するか否かは、経験から認識されたこの本性を介しては、けっして推理され得ない。私は私と同じ種類の存在者と物的法則の媒介によって結合されてはいるが、その上に私が靈的と名づけようと思うところの別の法則に従って、物質の媒介なしに結合関係にあるか否か、またいつかそうした関係に立つであろうか否かを、私はけっして私に与えられているものから推理することはできない」¹⁹。

カントは、ここで「感覚の夢想」と「理性の夢想」との未決におわった問題を、続いていっそう哲学的に洗練された形で、「可感界 mundi sensibilis」と「可想界 mundi intelligibils」との関係という形で整理しようとする。「可感界」というのは、対象によって触発される表象を受容する主観がつくりだす「感性的な認識」の世界、「現象する通りの事物の表象」の世界のことであり、「可想界」というのは、「感性」の限界のために主観のなかに受容されないものを、「理知 intelligenz」によってその「存在」を洞察することで成立する「悟性的な認識」の世界、「存在する通りの事物の表象」の世界のことである。この二つの世界は、「感性的な認識」が、「時間」と「空間」という「形式的原理」を生得的に内在させていることによって、必然的に「悟性的な認識」に結びつけられ、宇宙の普遍的連結の認識が可能になるだろう。ただし、この「形式的原理」によって、「感性的な認識」が「悟性的な認識」の境界を犯すという「窃取の誤謬 vitium subreptionis」が生まれ、「悟性的な認識」が攪乱されるので、その誤謬を犯さないように、判断を下す時に守るべき「一致の原理 principio convenientiae」がある、という²⁰。見られるとおり、カントのここでの認識論は、「感性的な認識」の重要性を認めつつ、「時間」と「空間」を感性に内在的な原理とすることで、「悟性的な認識」の範囲に宗教的先入見や形而上学的な抽象的存在論を囲い込むことで、客観と主観との関係に限定的な「一致の原理」という視点を表面化させた

のである。

『純粹理性批判』において、この「一致の原理」は、「カテゴリー」問題として総括される。ヘーゲルの「差異」論文によれば、「カテゴリーの演繹」の原理においてこそ、カント哲学の「真の観念論」の立場からの「主観と客観の同一性」は、もっともはっきりと語られている。けれどもたった十二個、厳密には九個の「カテゴリー」の外には、「感性と知覚の巨大な経験的領域、絶対的なアポステリオリテート」が存続しており、その意味では、「主観と客観」については、逆にその「非同一性」が「絶対的な原則」に高められていることになる²¹。「客観」である「宇宙的理念」については、「感性的な認識」の及ばない領域が「物自体」とされて、認識の外に残されてしまった。「純粹数学」が「ア・プリオリ」な総合認識としてはたらくのは、「感官のたんなる対象」の範囲に限定されていたし、「空間・時間」の「形式」も、「感性」に関わっているだけで、「物自体」を規定することはなかったからである。他方では、「靈魂」、「不死」、「神」など、従来の「形而上学」で、経験の可能性を越えた「超越論的理念」については、「理性」が必然的に「二律背反 Antinomie」に巻き込まれざるをえないことを理由として、その「悟性」的限界を越えることが越権として批判されたうえに、主観の枠を出て、客観的な認識へと進出する道が遮断されてしまった。

カントのこのような「主観と客観との同一性」の中途半端さ、およびその結果として必然化した自己撞着を、いずれもイエーナ大学の哲学の講壇を基盤にして、相反する方向で徹底していったのが、フィヒテとシェリングとのそれぞれの「哲学体系」の展開過程であった。ヘーゲルが「差異」論文で用いている表現を使えば、フィヒテは、「自我 = 自我という形をとった純粋な自己思惟」を原理とした「主観的な主観 - 客観 das subjective Subjektobjekt」という同一性の方向へとカントを徹底してゆき、シェリングはさらにそのフィヒテを「自然哲学」を原理とした「客観的な主観 - 客観 das objective Subjektobjekt」という同一性の方向へ徹底したのであった²²。そしてこのように「主観と客観との同一性」が逆の方向性において問われているような哲学的な原理の「分裂」は、時代が課している「哲学の要求」の新しい表現でもあった。カント哲学は、その「悟性」による「反省」によって、「有限なもの」を止揚して「理性」に高まろうとしたが、「理性」の活動を対立のなかに固定してしまい、「悟性」へ立ち帰ってしまっていることは、かつてイエーナ大学でカント哲学を宣揚したラインホルトが、フランス革命後にキール大学に移って「体系の動揺」を来たし、哲学の「基礎づけ」ということで、「真理への愛と信仰」を説いているという吐き気を催させるような状況に示されているとおりである。だが「かつては、精神と物質、靈魂と肉体、信仰と悟性、自由と必然等々」の対立として意味をもっていた関心事は、「文化的状況の進展とともに理性と感性、知性と自然、そして一般的概念としては、絶対的主観性と絶対的客観性との対立という形式に移行している。」こうしてヘーゲルは、自分の哲学がこれまでの「悟性」を越える新しい「理性」の立場であることを、次のように確認するのである。「固定されたこのような諸対立を揚棄すること、これこそが理性の唯一の関心事である。」「必然的な分裂は生の一要因であり、生は永遠に対立を通じて形成されるものであって、もっとも生き生きとした

全体性は、最高の分裂からの自己回復によってのみ可能であるからである。」²³

ヘーゲルは「差異」論文のなかで、このように、「主観と客観」、「思考と存在」という近代哲学の「根本問題」の必然的な帰結として、ドイツ古典哲学の展開を位置づけている。ここでは特に立ち入ることはしないが、フィヒテとシェリングとの「哲学体系」の差異を論じながら、両者をそれぞれに一面的な「主観と客観との同一性」と捉えることで、明らかにすでに自分の「理性」の哲学の独自性を明らかにしていた。そんな箇所をいくつも拾い出すことができる。「観念的な対立が絶対的同一性をまったく捨象する反省の仕事であるのに対して、実在的な対立は理性の仕事である。理性は、対立するもの、すなわち同一性と非同源性を、認識の形式においてばかりではなく、存在の形式においても同一化する。このような実在的な対立においてのみ、主観と客観の両つが主観 - 客観として指定される」²⁴。「理性が、両つのも【自己意識と自然】を主観 - 客観として指定するのは、理性が、自分を自然及び知性として産出し、これら両つのもものうちに自分を認識する当のものであるからである」²⁵。ラインホルトに向けたこの論文の結びも、同じくヘーゲルの立場を再確認させてくれるものと言えるであろう。「哲学とは、分裂しているものの死を絶対的な同一性によって生へ高め」、「両者を等しく母のように指定する理性によって有限な物と無限なもののこの同一性の意識、すなわち知と真理とを追求するものなのである」²⁶。

(4) 「矛盾」と『精神現象学』の方法

ヘーゲルの「討論テーゼ」の「矛盾」に関わる議論がやや長くなっているが、もう一点挙げておかなければならない論点がある。それは、すぐ上に見たフィヒテとシェリングの「哲学体系」の差異にかかわる「主観 - 客観の同一性」問題が、「イエーナ期」の最後を飾る『精神現象学』の最も基本的な方法として整理されていることである。

ヘーゲルは、『精神現象学』の「緒論」で、「主観と客観の同一性」の問題を、「自然的意識」と「学」との「矛盾」として設定する。その場合に、「同一性」は、「自然的意識」が「現象する知」の道を辿ってその主観性を揚棄し、「学」の客観性に向かって、認識の実在性を実現していく道程の問題となる。この道程では、「自然的意識」は、「実在性」と「学」とに関わる「検証」を受けて、「意識」の内部と外部とのそれぞれに矛盾をはらんだ認識の二つの局面を通らなければならない。

まず「意識」の内部での認識の局面について、ヘーゲルは次のように書いている。「意識は、或るものを【意識している際には、それを】自分とは区別しながら、同時にこのものと関係している。言い換えるならば、このことは、或るものが意識に対して / 開かれて存在している etwas für ein Bewußtsein といった状態にある、ということである。或るものがこのように連関しているという特定の側面、つまり、或るものが意識に対して / 開かれて存在しているという側面が、知るということ das Wissen である。その一方われわれは、【或るものの】このような他のものに対する / 開かれた存在 dies Sein für ein aderes と自体 / 本体的な存在 das an sich Sein とを区別する」²⁷。

たいへん意味のとりにくい文であるけれども、ここでヘーゲルが慎重に取り出している問題は、「意識」の内部での認識過程では、「或るもの」と「意識」（ここでは「自己意識」になる）とが区別と連関との関係にある、ということである。これは、先の「差異」論文では、「主観的な主観と客観との同一性」といわれたフィヒテ的な原理そのものであることに気がつくのは容易だろう。

すぐ続けてヘーゲルは、「意識」の外部での認識の局面について、次のように書いている。「まったく同じことだが、知ることに連関させられているものは、知ることとは区別されていて、この【意識内での知る】関係の外に【意識から自立して】存在するものとしての位置にある。このような自体的／本体的な存在 das an sich Sein という側面は、本当のもの／真理 die Wahrheit と呼ばれる」²⁸。

ここでもヘーゲルの表現は慎重であるが、認識が、意識の外部に、意識から独立したものを前提としていて、その際の認識の実在性／真理性については、それ自体として存在するものを規準としていることがはっきり言われている。ここでは、客観とは、存在、もしくは自然を一方として、それに対立するのが感覚／感性／個別の人間という矛盾が位置づけられることになるが、それはそれでまた、先の「差異」論文における「客観的な主観と客観の同一性」といわれたシェリング的な原理を組み込んでいっているものである。シェリングは、フィヒテに対して、その「主観的な主観 - 客観」原理が、現実性をもつためには、「自我」が「自然」のなかで現実的活動性／ポテンツ Potenz をもたねばならないことを指摘して、自分の「客観的な主観 - 客観」原理の正当性を主張したのであった。

この後の局面に関しては、「自体／本体的な存在 das an sich Sein」が「本当のもの／真理 die Wahrheit」としていわれているが、そのような「検証」の「尺度」については、上に引いた段落のすぐ前の段落に、「現象する知」に対する「学」の関係において、「認識の実在性を探究し検証する尺度」として、「自体的／本体的な存在 das an sich Sein」の他に、「本質的存在／本質 das Wesen」が挙げられている²⁹。つまりヘーゲルは、『精神現象学』においては、フィヒテ的ならびにシェリング的な原理を自分の哲学の認識過程のうちに組み込み、「意識」の外部での認識過程に関わっては、「自体／本体的な存在」を、そして「意識」の内部での認識過程に関わっては、「本質的存在／本質」を、「本当のもの／真理」の「尺度 Maßstab」³⁰としているわけである。シェリングの場合は、その原理の現実的な「同一性」そのものが、依然として「自然の知性との平行 Parallelismus」を方法的に仮定したものであった³¹点に、「絶対者を暗闇」におく直観主義の弱点を内蔵していた³²。ここでヘーゲルが現実的な検証規準を設定していることは、シェリング原理に対するヘーゲル原理の「差異」が決定的なものになっていることを表現することになった。

ヘーゲルは、『精神現象学』において、このような形でフィヒテとシェリングの対立した「哲学」原理を組み込み、自然 - 人間 ↔ 意識 - 学という形で二局面・四肢構造として、その認識の方法を作りあげ、それを発動させることになった。その際に、その内部の何層もの次元の「矛盾」

を一体性的な原理として確保することが可能になったのは、認識の主体として、フランス革命の過程で確認されていくような近代的な個人³³をすえ、その個人にデカルト的「感性」と国民経済学的な「欲求」を装備³⁴させ、自然と人間社会とを、ゲーテ的な有機的自然観と市場経済を「肯定的総体性」である国家に従属させるヘーゲル独特な経済体制によって接合³⁵できる、と考えたからである。

以上見てきたように、「矛盾テーゼ」は、古い形而上学を克服する課題をめぐって、当時のドイツ哲学の根本的な対立を条件づけていた根本問題であり、ヘーゲルの立場は、その問題をめぐる分界を徹底し、それによって自分自身の独自の哲学体系の構想を可能にしていく中心問題であったことが分かる。それ故にまたその「矛盾テーゼ」は、それ以後の近代哲学の立場を決定する根本問題としての位相を決定的なものとするようになった。

第二条 「三段論法推論」と「イデアリスム」

Syllogismus est principium Idealismi.

三段論法推論は、イデアリスムスの原理である。

(1) ヘーゲル「推論」の独自性の成立

この「三段論法」、つまり「推論」をめぐるテーゼについてのローゼンクランツの説明は、「ヘーゲルの論理的な方向は決定的」となり、「推理の形式が理性そのものの形式であることを改めて明示したカント哲学のひとつの帰結に過ぎなかった」と、いう。フィヒテが、立論する際に、定立、反定立、総合の三組一体方式へと三段の論理を展開し、シェリングが「主観と客観の一体性」の原理で、二重性と同一性とを基礎にすることになったから、さらにヘーゲルはこのような三段構成の論理を「推理」としてまとめ、「イデアリスムスの原理」として貫徹することになったという³⁶のであるが、その説明では、「推論」がフィヒテ シェリングの系列の「帰結」であるというだけのことで、ここでどうしてヘーゲルがあらためてこれを「イデアリスムスの原理」として押し出そうとしているのか、その肝心の点については、立ち入った説明をしないですませている。

金子の場合にも、説明の重点は、まずは「推論」がここで取り上げられている理由におかれている。第一条の「矛盾」は、「肯定判断」と「否定判断」との対立の形を取った場合、対立を成立させている第三の条件が媒介項となっているのだから、対立しあっている判断の総合である「推論」に移行するのは当然である、という³⁷。この説明は、第一条を「肯定判断」と「否定判断」という「矛盾」関係の場合として捉えて、第一条と第二条との接続関係に注目しようすることに特徴があるが、第一条での「矛盾」は、かならずしも二つの「判断」間の「矛盾」関係だけに限定されたものではなかった。形式論理学の範囲で考えても、論理的な「矛盾」関係としては、「判断」におけるものの他に、「概念」による「直接推理」における「矛盾対当」の場合も含むは

ずである。そしてこの[直接推理]の場合にも、当然その当否の判定に際しては、いわゆる[概念の周延]関係などの第三の視点の導入が必要だが、それはふつう「対当法 Apodiktik」などという名で呼んで、「判断」関係としての三段論法からは区別している。そうなるとうまく、どうして「三段論法」という「推論」の方法がそもそも問題になるのか、というところに議論は帰ってくることになる。

それで金子は、ヘーゲルの「イエーナ期」最初の講義となる1801-02年(正確には04-05年)冬学期の「論理学-形而上学」で、「概念-判断-推理」の系列が示されていることに着目する。彼のこのような独自の論理形式の展開は、親しくしていたヘルダーリンの1795年の「判断」論にも見られ、自分自身の手稿断片「信ずることと存在すること」(98年)のなかでもすでにそのような展開を暗示していたものだったし、17年からの「ハイデルベルク期」に属する『エンチュクロペディー』において、「概念」の「原始分割 Ur-teil」が「判断」となり、さらに「判断」の「繫辞」が「媒語」として独立させられることで、「概念-判断-推論」を系列的に展開していることによっても裏づけられる³⁸、というのである。

こうして、ともあれ、ヘーゲルの独自の「推理」論が、「イエーナ期」の「形而上学-論理学」(1804-05年)の講義の時点には基本的な論理学の構想のなかに位置づけられて展開される段階に達していた³⁹ことを確認できる。中埜肇も、ここでの「推論」テーゼは、やがて「ニュールンベルク期」に書かれる『論理学』へ向けての「一種の決意表明」⁴⁰と捉えているのだから、金子の場合と同様に、ヘーゲルの「推論」が、従来の形而上学的な論理学とは異なった「弁証法的な論理学の画期」として「イエーナ期」を確認することで、この第二テーゼの「推論」についての説明を終えていることになる。

しかし、そのかぎりでは、金子の説明についても、中埜の説明についても、ローゼンクランツに対してと同じように、どうしてその「推論」が「イデアリスムスの原理」なのかと、いま一度問い返さなければならないことになるだろう。

(2) 「イデアリスムス」とその「原理」性

さて、第二条のテーゼで、どうしてヘーゲルはそのような「イエーナ期」をもって画期とする「推論」が、また「イデアリスムスの原理」であるというのであろうか。そもそも「イデアリスムス」とは、まずはどういう概念だったのか。

金子は、「イデアリスムスとは、もとよりイデーの立場のこと」であり、「イデー」とは「推論」における「媒語」のことで、その「媒語」を与える「die transzendentale Anschauung【先験的直観】」の立場をいう、としている。「トランスツェンデンタル」というのは、「カントにあってはア・プリオリなものを可能にするもの」のことであるが、フィヒテとシェリングとを通ずるヘーゲルにおいては、対立するものを越えて統一づけるもの、「媒介をも与えるもの」を指す。つまり「主客対立をも統一づけるもの」として「推理」を考えるので、それが「イデアリスムスの原理」だ、というのが金子の解釈⁴¹である。

この「イデアリスムス」とは、「主客対立」を「統一」する立場なので、一般に使われているように、实在論もしくは唯物論に使われているような意味での一面的な「観念論」のことではないというわけである。同じく中塾肇は、グロックナーによりながら、次のように解釈している。「このイデアリスムスは实在論との対比における観念論ではなくて、实在をその全体性において包括するために両者を合一したレアール・イデアリスムス」であり、ヘーゲルが構想しつつある「絶対的観念論」⁴²の立場をいち早く宣明したものである、と。つまり、その「イデアリスムス」が、抽象的・観念的ではなく「レアール」であることを強調して理解しているわけである。

ところで、ここにヘーゲル自身が「イデアリスムス」について具体的に述べている講義記録の断片がある。1801 - 1802年の冬学期か1803年かのいずれかのもので、「絶対的な本質存在 das absolute Wesen の理念……」^マという見出しがつけられている。「理念そのものの外部へと押し広げられた学 ausgedehnte Wissenschaft は、イデアリスムス、つまり論理学となるであろう。その論理学もまた、ちょうど理念を内にはらんだ形式がもろもろの規定されたものを絶対的なものへと築きあげようと努力するような仕方、それみずからの内で、概念の活動をする。……その次にその学は、理念の实在性の学へと推転 übergehen して、さしあたりは理念の实在的な身体を提示し、このような身体として認識するのは、まずは天界の体系であるだろう。ついでその学は地上に降り立って、有機的なものあるいは個別的なものの在りようにまで及ぶことになるが、その前に、有機的なものの概念の理念的なもろもろの契機を概念によって捉えなければならない。つまり力学的なものを、それが地上に仕組まれているがままに概念によって捉え、化学的なものを概念によって捉えなければならないのである。有機的なものの理念そのものは、地の鉱物体系、植物体系、動物体系という形をとって実在化される。だがここに到りついたところで、学は、自然から抜け出して精神となって立ち上がり、絶対的な人倫状態として組織されることになるであろう。自然の哲学は、精神の哲学へと推転するであろう。理念は、理念のイデア的／観念的諸契機 ideale Momente、つまり表象と欲求を、自然の力学ならびに化学に対応したのものとして、自分のうちへと総括することになるだろう。そして理念は、必要と法とをみずからの支配のもとにおき入れることで、みずからが自由な民 freies Volk として実在するものとなるだろう。この自由な民は、最終的には、宗教・芸術の哲学における第四番目の部門において、純粋な理念へと立ち帰って、神の直観に与る有機的な集いとなるのである。」⁴³

ここでヘーゲルは、「討論テーゼ」において「イデアリスムス」という概念を用いた直近の時点で、その概念の内容を具体的に展開していることが分かる。その「イデアリスムス」とは、「理念そのもの」の「学」であることにその由来をもっているというのだから、もろもろの「学」の成果として体系化された概念体系や諸概念を総括した「理念 Idee」の学を意味する言葉であって、たんなる「観念 idea」を原理とする「主義」もしくは「立場」を意味しているわけではない。しかもその「理念」は、「外部へと押し広げられた」ものとなる実践的な次元を予想しているものである。その「理念」は、「学」としては、直接的には「論理学」に構成されているが、従来の「形式論理学」のように、「形式」にはとどまることなく、もろもろの現実的に「規

定されたもの」を「概念」として捉える活動となっている。前の議論に結びつけば、そのために「推論」の弁証法的な現実化が必然化することになる、ともいえるだろう。そして次にはその「学」は、力学、化学の階層から始まって、鉱物、植物、動物の有機的な諸階層——ヘーゲルの見解では「鉱物」も同質なものの肯定的な「一般性」を確保することで「有機的なもの」⁴⁴である——を潜り、「自然哲学」の領域から、人間の階層である「人倫」にかかわる「精神哲学」の領域に入る。こうして「学」は、「論理学」、「自然哲学」、「精神哲学」の諸領域を経て、「自由な民」が最終的に「絶対的な人倫」状態を実現して、「宗教・芸術」という第四の領域で、「神の直観」に与りうる神性を獲得するまでの未来構想をもはらむ。つまりヘーゲルのテーゼにおける「イデアリスムス」とは、「主観と客観との同一性」そのものの理念性の強調にあるのでなければ、またその「実在性」にアクセントを置くだけでなく、自然史と人間史とが「自由の民」——ファウストは、「自由な土地に自由な民とともに立ちたい」と願った時に、「時よ止まれ」と叫ぶことができた⁴⁵のだった——の実現に向かうという歴史的自由の未来を理念化する哲学的立場の表現だったのである。

こうして「イデアリスムス」が理念に発する現実的な哲学的体系であるとして、では「推論」がそのような哲学体系の「原理」であるとは、どういうことなのか。実は、「イデアリスムス」が現実的な哲学体系であるということそのことが、「無限判断」を構成していることが、その答えとなる。その答えを、端的に与えているのが、『精神現象学』の次の個所ではなからうか。「理性の概念のうちにある命題」は、「自己 das Selbst が物 ein Ding であるという無限判断であり、それ自体を揚棄する」⁴⁶。しばしば「思弁的な命題」として神秘化されるこの「無限判断」とは、形式論理的には、「自己・自己意識・自我」という「観念的な存在」が、「自己・個人・自分」という「物質的・身体的な存在」であるという非同一性の同一性を表現する判断形式を指す。この「無限判断」は、「思考」を「身体」の実体として表象するヘーゲル的な能動的な「イデアリスムス」によって、いったんは肯定された身体的な「自己」と身体を介しての意識外の世界との現実的な諸関係に対する観念的な「自己」の依存性を否定して、後者の能動性が、前者を「媒介」にして、自己実現化する運動をおこなうのだから、その能動性の原理が「推理」を形成するわけである。金子の場合には、「観念的な存在」としての「自己」と「物質的・身体的な存在」としての「自己」との一体性のヘーゲルによる暗黙の承認が、「媒語」である「存在」の「超越的直観」⁴⁷であるとして、観念論的に受け取ることになってしまう。イポリットが「無限判断」について、「思惟と存在との同一性」を「概念」として捉えることで、「表象に止まる理性の本能は、この無限判断から反省判断に移行し、直接性から媒介にまで高まらなければならない」⁴⁸と書くとき、実は、人間の社会的実践的な変革の活動を介してだけ、自然と人間社会の内面的で全体的な運動がはじめて人間の認識に獲得できるのである、ということ語っているにすぎないのである。

観念論でいう「自己」とは、「自我」、「自己意識」、さらには「理性的な自己意識」といわれているさまざまな観念的主体性を表現するものであるが、どの表現でいわれるものにしろ、それは

同時に身体という現実的・物質的な特殊個人たる「自己」に担保されており、前者の現実的な存在と機能は、後者のそれとは区別されながら、後者に支えられることなしには不可能であり、とりわけ前者の現実への働きかけは、後者なしには不可能である。ヘーゲルはこの事実を、『精神現象学』においては、観察的理性からの結論として確認する。シェリングにも、この「自己意識」における身体的「自己」との弁証法的な一体性の確認があったならば、「思考と存在との一体性」問題で悩んで、結局「思考」と「存在」とのライブニッツ的な予定調和論的「並行論」を仮定せざるをえなかった認識論的な罨から、したがってまたヘーゲルによって「ピストルからでも発射されるように、いきなり絶対知ではじめる」⁴⁹と批判されたようなその神秘的な直観主義から、みずからを解放できたはずである。それがそうならなかったのだから、この「原理」のとらえ方で、すでにヘーゲルとシェリングとの間には、差異があったということであろう。第二テーゼが、「原理」という言葉が語っていたのは、またこの秘密でもあった。

(3) 「イデアリスムス」の否定的意味

もっともヘーゲルは、『精神現象学』の時点では、「イデアリスムス」の意味をもっと限定的に、また否定的な意味合いで使っている場合がある。それは、「意識」が「感覚」、「知覚」、「悟性」を経て、ようやく「理性」の段階に入ったところでのことである。「理性は、意識がすべての実在性であるという確信である。観念論／イデアリスムスは、理性の概念をそのように言い表わしている。」けれども近代に入って、「意識」にとっての「本体としての存在 das Ansichsein」が自分の「真理」である側面を、「感覚」から「理性」に至るまでの認識と論理の歴史的発展の側面とあわせて、すっかり忘れ去ってしまい、いきなり「理性は、全実在であるという確信」だけが押し出されるようになった⁵⁰。こうして「イデアリスムス」は、「一面的で単調な観念論」となり、客観性を「カテゴリー」に依存するカントのような「学の恥」が生み出されることになった⁵¹し、「すべてのものは自分のもの」とする主観的観念論が出てくる一方、その「空しい私のもの」を充たすために、フィヒテのように、「理性」には「外的な障碍 ein fremde Anstoß」⁵²が必要だとして、シェリング的な観念論的「自然論」の成立を必然化する結果にもなった。またその理論的な空虚を補完するために無批判的に経験を追い求め、それに拜跪する「絶対的な経験論」が出現するが、それに反対して「純粹意識」に立て籠もり、一切の「実在」に否定を向ける「スケプシス主義」が自己主張をはじめ⁵³。こうした全体の思想的な動乱の状況の下で、「観念論」から「経験と観察」に立ち戻って、「理性の完全な実現」を目指すべき努力が必然化しているのだ、というのがヘーゲルの「イデアリスムス」に対する状況診断となっているのである。

「イデアリスムス」という概念には、以上見てきたように、「イエーナ期」の最初と最後とにおいて、ヘーゲル自身によって、二つの異なった位置づけが与えられている。1801 - 02年の冬学期の「論理学 - 形而上学」においては、カント以降のドイツ観念論の革新的な理念を国民的な立場から批判的に徹底する方向性を示す全体的な歴史的世界観のことを意味していた。そのなかには、その「学」的展開が、論理学 - 自然哲学 - 精神哲学という「体系」性をはらんでいて、その

体系的連関そのものが、一つの「推論」を構成することになっていたことは、上来の論議の経過から十分に留意しておきたい論点の一つである。

1807 年の『精神現象学』においては、すでにヘーゲルが共通の原理からの系統的な発展と考えてきたカント - フィヒテ - シェリング - ヘーゲルのそれぞれの「哲学体系」が、その分化をあまりにも顕著に示すようになっていた。そのために「イデアリスムス」は、共通の発展的な理念であることを離れて、相対的な一つの方法的概念となり、批判的に乗り越えられるべき哲学的傾向性を表示することになった。「イデアリスムス」に本有的な主観主義は、ヘーゲル哲学にとっては、「観察的理性」において自然主義へと推転していく新しい「推論」の始まりを示す一つの端項として位置づけられ、「自然」の对象的認識を不可分の構成要素として要求する役割を演ずることになるのである。

「討論テーゼ」の時点で、ヘーゲルが「イデアリスムス」の二つの側面のうち、この後者についてどこまで自覚的であったかどうかは具体的には分からない。けれども、『精神現象学』での「イデアリスムス」の議論がフィヒテ主義をその端的な事例に挙げていることを考えれば、彼が『差異』論文を仕上げた時点で、少なくともそれについては批判的な視点をすでにもっていたことは確かであろう。そして「哲学体系」としての前者の側面に具体的に論及するようになり、やがて『精神現象学』において、後者に対してははっきりと理論的・論理的にまとまった批判を対向させるようになったのであろう。

第三条 「自然」と「精神」の法則の差異

Quadratum est lex naturae, triangulum, mentis.

四角形は自然の法則、三角形は精神の法則である。

(1) 第三条テーゼの秘儀的視点

「自然」と「精神」との法則の差異を「四角形」と「三角形」とによって特徴づけたこのテーゼは、その特徴づけによってさまざまな解釈を許してきた。

ローゼンクランツは、ヘーゲルとほぼ同世代の F・パーダーなどによってギリシャ古代の神秘的な「三元数」を復活させていたことや、プラトンに火：空気＝水：地といった比例関係で自然の運動を説明する「四元素」説があるなどのことから、ヘーゲルが「自然」の「四角形」という比喩を思いついたものとしている。また「精神」の「三角形」については、プラトンの『国家』が、理性・意志・欲望という魂の三つの部分に対応した政治階級・軍人階級・商工階級という「三元構造」を理想としていたことに関係させている⁵⁴。

ここでローゼンクランツが名を挙げている F・パーダーについては、松山寿一によるもっと立ち入った論稿がある。パーダーは、自然哲学においては、当時シェリングと理論的な協同関係にあって、カントが物質の「動力学」をニュートン的な「引力 - 斥力」説で説明していたのを批判

して、両力を総合的に構成する第三の力を「重力」に求めていた。だがパーダーの仕事での問題は、この「三つの力」のことではなくて、論文「ピュタゴラス的四角形」(1798年)という論文である。そこには、「原理は四つあってはじめて自然論は完全になる」、「完全数の十は、一、二、三、四の総和からなり、最後の四の数が加わることによって完全数が構成され、四は図形の構成数としては……立体、すなわち頂点が四つの四面体である」⁵⁵ というピュタゴラスの説が紹介されている。この松山の紹介を手がかりにして考えてみると、このパーダーの仕事は、シェリングと親しいヘーゲルにも当然知られていたであろうし、ピュタゴラスのこの「四面体 Quadrat」——「四角形」の意味もあるので——論がヘーゲルの第三テーゼにおける「自然」の「四角形」という比喻になった、ということは十分にあり得ることなのである。またそれが「数」論であることも、次の第四テーゼがやはり「数」に関わっていることからしても、その関係づけには有力な意味があると言えるだろう。

(2) ヘーゲルの論理への内在化視点

こうした古典への関係づけからする説明の他に、ヘーゲル自身の論理に内在して第三テーゼを説明しようとする試みもある。

金子は、ローゼンクランツがヘーゲルの遺品展覧会に出された秘儀的な「三角形」図像——現在はGWの第5巻に収載されているが、ここでは省略する——のことで上の見解を補強しているほか、「四角形」については、それを「力の平行四辺形」論ととる見解を紹介しているが、その見解については、ヘーゲルのニュートン物理学への反発から考えて、それを正当化することはできないとする。「三角形」については、金子自身の見解として、ヘーゲルが元神学生であったことから、キリスト教の「三位一体」論に関係させている⁵⁶。けれども、ヘーゲルは、この時点では、すでに哲学を原理的に神学から区別する立場を一貫してとってきていることを考えると、そのような金子の説明はやや安易にすぎるのではなかろうか。

これに対して、中埜の見解は、単純で明快である。「精神」と「三角形」との関係については、ヘーゲルの「思弁的な思考形式」が、「弁証法の形式」に見るように「三肢方式」によっていることを挙げ、「自然」が「四角形」といわれていることについては、自然のなかには真の総合がなく、あるのは分裂や対立の複合にすぎないのだから、分裂や対立を2とすれば、その複合は $2 \times 2 = 4$ となるからだ、と説明する。これはこれで、一つのあり得る説明ではあるだろう。

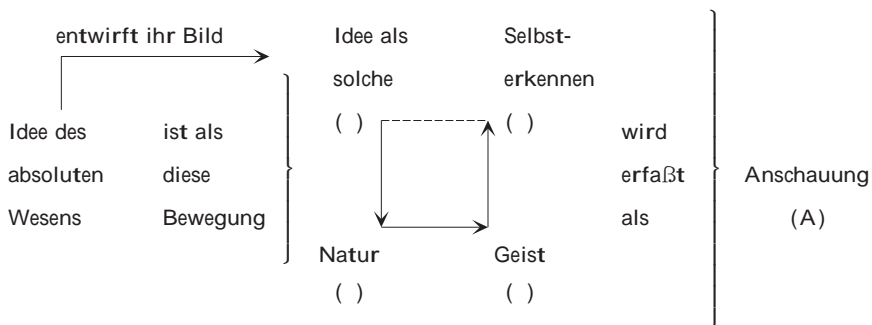
中埜の理解にしたがって、「推理」における認識過程が「推理」の重要性を考えて、「精神」における「三肢方式」が「三角形」に当たるというのであれば、また「自然」における認識が、第一条にかかわって問題にしておいたような「四肢構造」をもっていることで、「四角形」の説明とすることができるかも知れない。自然の認識、一般的に物質にかかわる認識過程は、自然 - 人間という二極的な客観的認識過程から表象 - 自己意識という二極的な主観的認識過程への二局面を経過するからである。

(3) 綜合体系的視点

しかし、第三条のテーゼにかかわって最も注目すべきものとして、ハインツ・キンマーレ Heinz Kimmerle 「イェーナのヘーゲル自然哲学」の考察がある。そこに掲載されている下の図を使って、その説の要点を追ってみよう⁵⁷。

まず左端には、「絶対知の理念 Idee des absoluten Wesens」と書かれている。キンマーレによれば、ヘーゲルにおいては、この「絶対知の理念」が、右方向への矢印が示しているように、「理念たる自分の像を構想」する。そうして () の位置で出発点に立った「理念そのもの」が、時計の逆回りの方向で四角形の辺にそって「運動を推進」してゆく。以下、「理念そのもの」は、() において「自然」による差異化を受けて () の「精神」に上昇し、またそこでの差異化を通してさらに自己確証を重ね、最後には、() の「自己認識」において「絶対知」に還帰する。この実線で描かれたそれぞれの角の部分、ヘーゲルの体系で「論理学」、「自然哲学」、「精神哲学」の位置を示している、出発点 () の「理念そのもの」と、到着点 () の「自己認識」との間が点線となっているのは、「理念そのもの」が「自然」と「精神」の世界を経過するなかで自己確証をかさねた結果、「絶対知」としての「理念」への自己還帰を果たしたという意味で、出発点と到達点との同一性と同時に、理念のより高い段階に達したことの差異性を表現しているからである。

ここで「自然」の認識に注目すれば、認識活動は、「理念」の全経過を辿る「四角形」となる。また「精神」の認識の場合には、「理念」は直接に「精神」に向かうので、その認識活動の経過は「三角形」となるだろう。こうしてキンマーレの図式は、この「理念」の運動の「体系的な性格を考慮した説明によれば、「自然」の「四角形」も、「精神」の「三角形」も、認識活動の経過に即して一度に説明できることで、きわめて説得的である。



さらにキンマーレは、「認識の活動」一般がこのような四つの次元を経過する「四角形」の運動であるだけでなく、各次元のなかに、またそれぞれに四つもしくは三つの小次元が内蔵されているとして、さらに詳細な図と説明とを加えているが、そのなかで、「三角形」問題と「四角形」問題は、さらに立ち入った規定を受け取ることになる。その図は省略して、説明の概略を見

ておこう。

「理念 die Idee」は、() の「理念そのもの」(「論理学と形而上学 Logik und Metaphysik」)の次元における「純粹直観 die reine Anschauung」から、その運動を始める。「理念」は、1. 「理念を内に含んだ形式 Form」の絶対化、2. 「明晰判明な直観 das feste und klare Anschauen の達成」、3. 「絶対的な反省 die absolute Reflexion」、4. 「絶対的な認識 das absolute Erkennen」の「目的 das Ziel」への還帰、というように、この最初の次元でまず「四角形」の小サイクルを経過する。

() の「自然」(「自然哲学」)の次元での「理念」は、1. 「天界の体系 das himmerliche System」から始まり 2. 「力学的なもの das Mechanische」、3. 「化学的なもの das Chemische」、4. 「有機的な自然 die organische Natur」(このうちには(1). 地球の鉱物的な有機体体系、(2). 植物的な有機体体系、(3). 動物的な有機体体系、そして(4). 人間社会がある)を経過し、最後の「地球」は、このような高度なものとして、4. 「天界の体系」のうちに復帰する。この次元にも、その内部には「理念」が経過する「四角形」があり、さらにはその下部に「四角形」の小サイクルが存在しているわけである。

() は「精神」(「精神哲学」)の次元である人間社会である。「理念」は、ここでは、1. 「表象 das Vorstellen」と「欲求 die Begierde」——() の「力学」と「化学」に照応——からはじまって、2. 「自由な民 das freie Volk」——() の「有機体」に照応——を成立させ、さらに() の次元には照応するものが欠けているのだが、新しく 3. 「国家 der Staat」が付け加わるとする。だからここでは、「自然哲学」段階の「四角形」ではなく、「三角形」が基本的図式になると、キンマーレはいう。だが彼の説明では、() の 1. 「天界の体系」に照応するものが() には欠けるとされているが、われわれの今日の視点から見れば、ヘーゲルには「世界史の哲学」があることを考慮して、「世界史」をそれに宛てて 1. とし、1. の「表象」と「欲求」は 2. 「市民社会」に、2. の「自由な民」は、3. にまとめることで、「国家」と「自由の民」とすることの方が、いっそう適切なのではなかろうか。フランスの J・ドント、イタリアの D・ロズールドなども主張するように、ヘーゲル哲学とは、世界史的に「国民を自由に向けて解放する」ことを本質とする哲学のはずであるからである。

最後に「理念」は、() の「自己認識」の次元に戻るが、そこでの「直観」は、1. 「純粹理念」ではあるが、2. 感性的直観的な「芸術 die Kunst」と 3. 理性的な「宗教 die Religion」を経過した結果として自己還帰した「理念」となり、始まりと終わりが重なって「精神の直観」⁵⁸として有機化されている。こうしてこの場合の小サイクルは、結局「四角形」を統合した「三角形」になるという特殊な形をもつわけである。

ただしこの始まりと終わりとが重なって、「精神の直観」となることにかかわって、ヘーゲルが「精神とは、改めて自分の最初の契機となって、自分のうちに完全に立ち返るものことである」⁵⁹と述べていることに注意しなければならない。「精神」の運動は、終わりがまた新しい始まりであり、「絶対精神として存在する」こととは、「他のものを自分自身として組み込みながら、

自分のうちへ立ち返ってくる無限性⁶⁰の運動となることである。だからヘーゲルの「哲学体系」は、現実の歴史とともに、つねに自己変革を続ける運動性を内在させており、少なくともその「理念」においては、世上の常識的な理解とは反対に、実にその「体系」の完結性においてではなく、開放性を確認することで終わっているのである。

こうしてキンマーレは、一見したところ神秘主義的と見える第三テーゼに、ヘーゲルの哲学体系構想を基礎にして、統一的な説明を与えることに成功したように見える。そこで下敷きにしたヘーゲルの体系構想は、その小サイクルの説明からも見てとれるように、ヘーゲルの「イエーナ期」直前の「体系構想」であった。ということは、ヘーゲルは、すでに「イエーナ期」にかなりはっきりとした「体系構想」を成熟させていた、ということである。

キンマーレが示した「四角形」を基礎にした「三角形」の複合的な組み合わせからは、いくつかの重要な当面の帰結が出てくるが、ここでは、少なくとも次の三点を指摘しておきたい。

- (1) ヘーゲルの「矛盾」を焦点にした「弁証法」は、世上しばしば単純に「正 - 反 - 合」の三項論理として還元的に理解されているが、その場合には、「自然」と「社会」とにおける次元と構造の違いが無視されてしまっている、ということ。
- (2) ヘーゲルが第二テーゼで「イデアリスムス」と呼んだものが、ここでは「論理学 / 形而上学」という体系的な位置づけを与えられていて、「純粋理念」から出発する文字通りの「イデアリスムス」は、体系の各次元の循環のなかで「学」的な検証を受け、過程の帰結として再び最初の位置に帰って来るときには、出発点における主観的・観念的な意味での「純粋理念」は、現実的な「理念」の「学 / 学的体系 die Wissenschaft」に推転しているものとして把握されなければならないのであって、もはやそれは最初の「イデアリスムス」であることを自ら廃棄しているということ。
- (3) ヘーゲル哲学体系の全体は、或る歴史的・理論的な循環を前提にしていて、理念的には、不断に新しい体系的な検証に向けて出発するために「理念」を更新し続ける運動的な体系であって、完結し、固定・静止したものとしては理解されていないこと。

(4) 「理念の直観」の方法的意義

こうしてヘーゲルの哲学体系にとって、その出発点は特別な重要性をもつことになるのだが、キンマーレによれば、ヘーゲルはその体系を「純粋理念の直観」から始めているにもかかわらず、「理念の直観の方法的な意義を明確に語ることを、どこでもしていない」、という。そして、ヘーゲルがシェリングと共同発行した『哲学批判雑誌』に掲載した論文「信仰と知」（1802年）のなかでは、「永遠なものの直観 Anschauen des Ewigen」という言い方をしていることの意味を問うて、「理念の直観」とは、「ひとつの内的、観念的な直観」であるから、「ある種の動的な構造的連関を、それがより内的に分化していくまに表象することを可能にさせる⁶¹」と指摘している。キンマーレが引いている論文「信仰と知」の具体的な課題がどこにあるのかは、それに「カント、ヤコービ、フィヒテの哲学という諸形態において完成した主観性の反省哲学」という長い

副題がつけられていることからあきらかであろう。この論文で、ヘーゲルが「永遠なものの直観」という言葉を使っているのも、まさしくその副題どおりの一連の「主観性の反省哲学」に対して、手厳しい批判を振り向ける文脈のなかでのことである。これらの哲学は、「反省的な文化」、ということは「通俗的な人間悟性 der gemeine Menschenverstand の文化」を体系に高めるというのだが、あくまでも「通俗的な人間悟性」の立場に止まろうとするために、自分自身がもっている「永遠なものの直観を断念してしまう」ことになるし、「人間」を認識するというが、「神を認識すること」もなければ、「人間と人間性が永遠の美の反映、宇宙の精神的焦点」であることも理解することもしないで、「絶対的感性」によって「信仰する能力」⁶²を飾り立てるだけに終るのだ、と。

ここから明らかのように、キンマーレが見るところでは、ヘーゲルの「永遠なるものの直観」の方法的な意味は、もろもろの反省哲学の「人間悟性」やロマン主義的な実定的信仰がともに「感性」的・外的な原理にとらわれている状況に対して、「理性」的・内的な原理を対向させるところに求めているわけである。だが、このように外的な原理に内的な原理を対抗させることは、ヘーゲルの当面の哲学体系において、「論理学」に「形而上学」を対向させている事情そのものなのである。ヘーゲルは、「形而上学」の手稿を、次のような言葉で書き出している。「論理学は、関係づけが終わり、関係づけられていた項が自立して離散するところで、終わるとなる。認識は、自分自身のうちへの反省をすることで、自分が自分の最初の契機となる」⁶³。こうしてヘーゲルは、認識を、外部の非有機的な存在の関係づけから、「自己意識」の運動に向かわせ、形式論理学の諸原理に否定を媒介することで運動のうちに引き入れ、客体に魂を見、主体を精神として展開することで、「形而上学」の次元を開いて行く。だがこのような外的な認識の過程と、内的な認識の過程とを自立化させつつ関係づけることは、さしあたりは『精神現象学』の「四肢構造」的認識方法の外枠を準備して、それに学の第一部という役割を割り振ることになる。つまり、キンマーレの注目した「純粹理念」の原理は、「形而上学」の次元の相対的自立性を発見することで、ヘーゲルの独自の認識方法の成立を準備することになったのである。

この『精神現象学』では、その「序論」のなかに「純粹理念」の方法論にかかわって、いまひとつの重要な論点が提示されている個所がある。ヘーゲルは、古代の学び方と比べて、近代における学び方には違いがあるという。古代の学び方は、「もって生まれた意識 das natürliche Bewußtsein」を、生活のあらゆる部分で確かめながら、一般的・抽象的な思考の形式を自分流に徹底的に仕上げることであった。だが近代の学び方においては、「個人」はすでに出来上がった「抽象的な形式」が眼前にあるので、「内的なものを直接に駆り出したり、普遍的なものを切り取ったり」することに苦心しており、「固定し規定された思想を揚棄して一般的なものを実現し、一般的なものに生気を与える」ことが、課題になっている。「だが固定した思想を流動させるのは、感覚的定在を流動させるよりずっと難しいことである」⁶⁴。

ここでヘーゲルが強調しているのは、まずは近代における学びが、いきなり内的・抽象的な形式、つまりは「純粹理念」からはじめざるを得ないというきわめてアクチュアルな問題である。

歴史的な段階でのどのような「学問」であれ、最初の「感覚的認識」そのものの段階ですでに、その認識の内面において、一定の理論的な方向づけや枠取りが前提になっているので、さらに前進するためには、その所与の「純粹理念」に、実践的な活性化の「生氣」を与えなければならない、ということである。その理論的枠取りは、今日流に言えば、フロイト的な潜在意識とか、情緒や気分染め上げられた先入見や偏見、さらにはイデオロギーといったものであったり、さらには明確な理論体系であったりするいろいろのものを含めて、意識的・無意識的な仕方、対象認識を条件づけていることからすれば、そこには、「学問」における「理論的負荷性」といわれる問題が提起されているわけである。

このような「理論的負荷」は、専門的・系統的な認識の蓄積と方法的な自覚とを前提にする「学問」分野であればあるほど、いっそう大きな役割を演ずることになる。だからこそカントは、まずは一切の認識の先天的条件や超越的な条件を洗い出そうとして『純粹理性批判』を書いたのであり、以後そのような「理論的負荷」の役割を洗い出し、新しい理論的な内部構造を構築しようとするオルターナティブが「形而上学」批判の名で取り上げられるようになり、その後のドイツ哲学の発展には、その「哲学体系」のうちに「論理学」の発展を必然的に伴うようになっていく。ヘーゲルの『精神現象学』は、この状況を集約的に表現しているのであって、まずは「感覚的確實性」という直接的な認識から始まるその叙述は、直接の認識の過程を経験する「自然的意識」という役者に配するに、舞台の進展を「理念」と「論理」によって主導するプロンプターもしくは監督を立てるといふ演劇的構成をとることになった。対象に直接する「直観」の認識は、歴史的に試された「理念」と「論理」に支持されることなしには、時代の空間と時間を对象的に構造化していくことは不可能なのである。

以上、キンマーレが提起したヘーゲルにおける「純粹理念の直観」の方法的な意義という問題は、ヘーゲルの悟性的・ロマン主義的な「反省哲学」への思想的対抗関係、「論理学」と「形而上学」との関係づけ、さらには「学」的発展における「理論的負荷」性など、「イエーナ期」のヘーゲル哲学がはらんでいたいいくつかの重要な思想的遺産に光りを当てる端緒になった。これだけでも、「イエーナ期」におけるヘーゲル哲学の多産性は明らかだろう。

第四条 「現実の算数」

In Arithmetica vera nec additioni nisi unitatis ad dyadem, nec subtractioni nisi dyadis a triade, neque triadi ut summae, neque unitati ut differentiae est locus.

現実の算数においては、加算でおこなうことは、一番目の数を二番目の数に加えること、減算では、三番目の数から二番目の数を差し引くことに他ならない。また三番目の数が和、一番目の数が差に他ならない。

(1) テーゼの翻訳問題

この第四テーゼも、一見何でもないのであるが、けっこう解釈の難しい問題をはらんでいる。まず最初に、ラテン語で書かれているテーゼについての翻訳問題がある。

金子は、ヘーゲルのラテン語による「討論テーゼ」と併せて、ラッソンによるそのドイツ語訳を紹介し、それに自分の日本語訳を提示している。

In der wahren Arithmetik gibt es keine andre Addition als die der Einheit zur Zweiheit, keine Substraktion als die der Zweiheit von der Dreiheit; die Dreiheit ist nicht als Summe, die Einheit nicht als Differenz anzusehen.

真の算数学においては、 $1+2$ 以外の加算にも、また $3-2$ 以外の減算にも、そうした和としての 3 と差 *differentia* としての 1 とにも、占むべき場はない⁶⁵。

この金子の訳は、何とも意味不明である。「真の算数学」には、「加算」も「減算」も、したがって「和」も「差」も、「占めるべき場」がないという趣旨だが、それはどう読んでもラッソンのドイツ語訳とはまったく無関係である。ラッソンのドイツ語訳は、上の拙訳そのまま、意味は、改めて説明するまでもないほど合理的でかつ明確であるだろう。

金子訳の問題点は、上段のラッソンによるドイツ語訳と下段の金子による日本語訳とを対照させてみると、ただちに明らかになる。金子が「1」、「2」、「3」と訳しているところが、ラッソンでは「Einheit」、「Zweiheit」、「Dreiheit」となっている。ヘーゲル自身によるラテン語の表記では、それぞれ「unitas」、「duas」、「trias」となっていて、それぞれは「一番目の数」、「二番目の数」、「三番目の数」を意味している。ラッソンの場合、それをそのままドイツ語に移していることは、金子訳のように、基数の「1」「2」「3」に対応する「ein」、「zwei」、「drei」という表記にはしていないことから明らかである。金子訳の問題をはっきりするために、ヘーゲルのラテン語を分かりやすい日本語に書き直すと、次のようになるであろう。

実際におこなわれている算数においては、一番目の数に二番目の数を加えるのを加算と呼び、それによって得られる三番目の数が和である。またその三番目の数から二番目の数を差し引くことを減算と呼び、その結果得られるのが一番目の数で、それが差である。

つまりヘーゲルは、「算術の学」を問題にしたのではなく、たんなる「数」の計算のことを問題にしている、任意の数についての加算と減算のことを一般的に説明しているだけのことであった。金子の訳が意味不明の珍文になってしまったのは、「真の算数学」という大上段の構えによって、ことさらにこのテーゼに深刻な意味を与えようとしたためであろう。中塾の場合は、このテーゼの訳についても金子訳とは違った工夫があるが、そのため返って混乱が増したことになり、このテーゼについて、「前のテーゼが図形神秘学であったのに対して、数の神秘学と呼んでしかるべきもの⁶⁶」と告白することになった。いずれにしても、すぐ上でヘーゲルが指摘していたような「理論的負荷」問題の重要性にとっては、さっそく金子と中塾の翻訳によって、まったく思いがけない格好の実例が提供されたわけである。

金子が「真の算数学」と訳しているのを、拙訳では「現実の算数」とか、「実際におこなわれて

いる算数」とかと書いている。だから、ラテン語テーゼにある「Arithmetica vera」の「vera」、ラッソンでは「die wahre Arithmetik」の「wahre」と書かれている形容詞の解釈の仕方の違いがテーゼの理解を分けることになっている。ということは、よく知られているように、ラテン語でもドイツ語でも、「verus」も「wahr」も、「真の」という意味と「現実の」という意味をもっているのだから、そのいずれを選ぶのか、という日本語としての選択の問題になり、結局は、ここでヘーゲルがその幅のある意味の内のいずれを用いているのか、その検証の問題になってくる（ラテン語、ドイツ語ともに、用例ではそれぞれの形容詞は女性形単数で活用されているけれども、もちろん意味上の変化はない）。

こうした意味の分岐について、ヘーゲル自身が説明している個所が『精神現象学』の「理性」の部分にある。「以前には、二つの側面が相次いで現われてきた。その一方は、本質ないし真なるもの／現実のもの・本当のもの das Wahre が、意識にとっての存在という規定のされ方をしてきた場合であり、他方は、それが意識にとって存在するにすぎないという規定のされ方をしてきた場合である。だが両方の側面は、ただ一つの真理 Eine Wahrheit に還元された。存在するところのもの、言い換えれば、自存するもの das Ansich が存在するのは、そのものがただ意識にとって存在する限りでのことであり、また意識にとって存在するものもまた、自存的に an sich 存在するということが、その真理である」⁶⁷。ここではまず、「理性」以前の段階の「現実の」系の用法が「das Wahre」という形容詞の名詞化語で示されていて、それには、たんなる意識にとっての外部的な存在を示すだけの場合と、逆に意識にとっての主観的な確信にすぎない存在を指す場合とがあるとされている。いずれもが「存在」にかかわらせた規定のされ方をしているので、また「本質存在 das Wesen」という表現に置き換えられるわけである。次いで「理性」の段階で、不定冠詞を大文字化して「ただ一つの」という意味を強調した「真理 Eine Wahrheit」が問題になることが説明されているのだが、ここでのヘーゲルの原文はきわめて屈折していて、邦訳しにくい。その意味は、例の「四肢構造」の方法に留意して説明すると、分かりやすくなるのではなかろうか。つまり「真理」とは、客観的に「自存するもの」として外部認識で対比的に確認されるものと、主観的に「自存するもの」として内部認識において理念化されて対象化されたものとの一致である、ということである。このようにまとめてみると、この「真理」の議論には、「差異」論文における「思考と存在との同一性」の問題の影が射していることが分かるが、それに立ち入る必要はここではないだろう。なお上記の文中の「自存するもの das Ansich」とは、他に依存することなく、内発的に存在を確保しているものをさす用語であり、カントの場合には「物自体 Ding an sich」などの先例があって「不可知なものそのもの」をさすが、ヘーゲルにおいては、このような「自体」は、「理性」によってその運動も構造も認識可能なものに転化しているので、訳語も別にしてみた。

以上によって、ヘーゲルにおける「verus」ないし「wahr」の意味するものが、どの認識レベルのものを指すのか、そのレベルによって分岐してくることは明らかだろう。この第四テーゼが問題にしている「加減算」の範囲の数学は、「外在的な行為 äußerliches Tun」⁶⁸を要求するも

のではあっても、「内在的な数学 die immanente Mathematik」⁶⁹には属していないのだから、「真の算数学」といかめしく構えるよりも、「現実的な算術」としておくだけで十分だったはずだろう。

ついでに言えば、ここでの困惑を生み出したヘーゲルのラテン語の数に関わる表記は、サイコロの目数等を指す場合の用法であった。少年時代からチェスやカードやタロットなどのゲームを好んだことが、彼のギムナジウム時代の『日記』に出てくるが、そうした趣味にかかわる用語が使われていたという罪のない話が、後世の学者の或る種の権威主義的な先入観を刺激したのだとするなら、これはこれでまた認識における概念形成過程に「理論的負荷」がかかったもう一つの例を加えることになるのだろうか。

(2) 「算術」と「教授資格論文」

ヘーゲルの第四テーゼを、「現実の算術」、「実際におこなわれている算数」として理解することにこだわったのは、このような問題としてはじめて、ヘーゲルの教授資格論文である「惑星軌道論」との繋がりが見えてくるからである。金子も、中埜も、ともにその点に言及することがなかったのは特徴的で、実は第四テーゼは、「惑星軌道論」の現実的正当性を担保するテーゼであった。

ヘーゲルの教授資格論文は、「教授資格討論」の後に、やや後れて1801年10月18日に、印刷されたラテン語の小冊子として大学に提出された。この論文の根本思想は、真なる哲学的な立場に立って、「理性と自然との同一性 *identitas rationis et naturae*」⁷⁰という哲学原理を——「差異」論文における「思考と存在との同一性」問題の延長上で——「惑星の軌道の法則」に適用することにあつた。そのテーマである惑星相互間の距離やその法則性に関する研究は、思いつきのものではなくて、彼がすでに長く携わっていたものだった。この論文は、空間と時間、平方と立方、直線と曲線、円と楕円の関係論を論じ、ケプラーに対しては弁護的で、ニュートンに対しては論駁的であり、そのさいH・シューバルトの研究による「惑星の系列を異なった凝集度を持った一つの線とみなすという考え方も忘れられてはいなかった。」こう書いた後、ローゼンクランツは、その論文が提出された時点ですでに悲劇的な運命を担わされていたことを伝えている。

「ヘーゲルが末尾に二ページにわたって「付ケタリ *Sperest*」という語とともに加えた小さい余論がなかったとしたら、その議論はシェリング自身が依拠していた当時の自然哲学の最も深遠なものの一つとして議論の余地のない価値を主張したことだろう」⁷¹。

ヘーゲルが論文の最後の部分に「付言しておきたい *superest*」としたことは、太陽系の第四番目の惑星である火星と、第五番目の惑星である木星との間に、未知の惑星が存在するかどうかという天文学上の論議に、それが存在しないという哲学的な仮説でもって独自の介入を試みることだった。ところが、その論文が提出された1801年の1月1日に、すでにイタリアのパレルモ天文学者ピアッツィによって、それまで存在が確認されていなかったその場所に小惑星ケレスが

発見されていたのだが、その情報をヘーゲルは知らなかった。ヘーゲルの哲学的な「推論」は、シュバルトの「惑星の凝集度による系列」論を踏まえ、プラトンの『ティマイオス』に出てくるピュタゴラス派の数列を利用したものだったが、それまでにいくつかの惑星を発見してきた実測の経験に基づいて立てられた数列仮説「ティティウス＝ボーデ」の法則に立った実測によって反証されたのだった。こうしてヘーゲルの哲学的な仮説による介入は、実証科学に対する形而上学の敗北という近代科学史の典型的な構図にもう一つ、新たな敗北の実例を加える形になった。

ところがヘーゲルのこの不幸な「付言」は、「数列仮説」を含むことで、第四テーゼの「数論」に大きな関わりをもっていた。

まず、ヘーゲルはどうしてピュタゴラス派の「数論」を利用したのか？ ヘーゲルはいう、太陽からの「惑星の距離の比」は、或る「等差級数の比」を示しており、この数列の第五項に対応する惑星が自然界に見あたらないことが問題になっている。ところがそこで用いられている「級数」は「算術的」であって、まったく「哲学的な意義」をもたない。そこでプラトンの二つの『ティマイオス』篇に、「惑星に関連づけられて説かれているわけではないが、しかしただデミウルゴスがこの比例に従って宇宙を形成したことになる」⁷² ものとして、次のような数列を取り上げる。

1, 2, 3, 4, 9, 16, 27 【1, 2, 3, 2², 3², 2³, 2⁴, 3³】

実際に『ティマイオス』で提起されている「数列」では、【 】の中に示した第六項が「 $8=2^3$ 」である⁷³が、それだと第五項の「 $9=3^2$ 」より少ない数になるので、ヘーゲルはそれを敢えて「 $16=2^4$ 」に取り替えることで、見掛けの「数」の流れを直線的な展開にしたわけである。それは、「算術的」な級数ではなくて、「哲学的な意義」のあるものであるためには、「数による自己自身からの生産になる数列」として「冪／累乗 Potenz」に合致した「級数」を提起するためであったし、またすでに発見されている木星の太陽からの距離が、この数の比に照合するものとさせる必要もあったからである。だがそのためにまた、プラトンの原典にある第六項の冪が特異になるのだから、本来の「級数」が持たせられている意味がまったく変わってしまうことになった。ともあれこうして無理やりに第五項以下、どの項の前でも空白が大きくなることを正当化することで、ヘーゲルは、第四項の火星と第五項の木星との間に「惑星」が存在しないという仮説を提起したのであった。

だがその「哲学的」な思弁によってつくられた「級数」観は、「現実の算法」として低く見ていた観測知に拠った「級数」観の前に、事実として敗北した、というのがここでの「数」の問題がもたらした現実的な帰結であった。そしてこの場合のヘーゲルの限界は、観測知に拠る「級数」が、観測の理論に支えられていることに十分注目していなかったことにあった。その限界を乗り越える努力は、間もなく「宇宙論」を初めにおいて「自然哲学」を講義で繰り返し取り上げ、「自然」から「社会」への発展過程を一つの「哲学体系」に組みあげていくさまざまな試みとなっていく。

もっともヘーゲルの「付言」そのものは、ヘーゲル自身の意図としては、けっして天体観測に

対して否定的な批判を目指したものではなかったことに注意しておかなくてはならない。ローゼンクランツがいうように、「天文学者たちの望遠鏡」が長い間求めて空しかった状況を見てきたヘーゲルは、「火星と木星との間には飛躍があり得る」ので、そこには求めるものが存在しないという「自分の仮説によって助けに行った」⁷⁴のであった。ヘーゲルの仮説も、デミウルゴスの宇宙創造にかかわるような「感覚的なものそのものの思想」である「数の系列」であったからこそ、実測に立つ「級数」のオルターナティブであり得ると考えられることが、その介入を正当化した。その意味で、ヘーゲルは、神秘的、スコラ的、もしくは抽象的・思弁的なものではなくて、紛うことなく「現実の算術」を実行したのであった。けれどもその際に、依拠した「学」的な「理念」を、当時の観測科学のそれではなく、プラトンの思弁の成果としてのそれに求めたことで、いわば自分の理論的原則に反する行動を取ったことが、その誤りを生むことになった。

(3) 「数」の意味の哲学的差異化

なおもう一つここでの「数」の問題で注意しておかなければならないことがある。それは、ヘーゲルが「級数」の例をピュタゴラスに求めた際に、「数」の自己生産性としての「冪 potentia」という視点に立っていた文脈である。すでに多くの指摘があるように、「討論テーゼ」の時点で、「展相説 Potenzlehre」に立って、シェリングの「自然哲学」はとりわけフィヒテの主観的な「知識学」との差異化を顕著にしはじめていた。そのシェリングと当面タグマッチを組んだヘーゲルが、「冪 / 累乗」を含んだ数列にこそ「理性と自然の同一性」があると考えるのはある意味で当然なことであつたし、不可避的なことであつた。シェリング哲学とヘーゲル哲学とのそうした結びつきを示すことになるのは、ここでもまた、ヘーゲルの「イエーナ期」が始まる直前の1800年末、フィヒテとシェリングとの間で交わされた手紙であつた。

フィヒテが、自分の「知識学」を「超越論的哲学」と自称する立場から、「自然哲学」のシェリングに宛てて、「自然がある虚構によって自分自身を構成するようにさせざるをえません」⁷⁵と書き送った時に、シェリングはそれに答えて、客観に「ポテンツ / 潜勢力」をおく「主観 - 客観の同一性」の立場を対抗させながら、書いている。「観念的 - 実在的なものとして単に客観的な、まさしくそれ故に同時に産出的なあの自我こそが、このような産出作用それ自体において自然にほかならず、そして知的直観の自我、乃至自己意識の自我は、この自然のより高次のポテンツに過ぎない」と。そしてシェリングは、その「自然哲学」の一つの「抽象」としての「数学の哲学」では、「線はひとつの次元で増減する量として算術の図式であり——算術の数列もやはり一つの次元しか持たない」⁷⁶としている。

この議論のなかから明らかなように、シェリングは、「自然哲学」の立場では、フィヒテの「自我」を「自然」の「ポテンツ」の展開のうちに組み込むなかで、またヘーゲルの第四テーゼの基本的な着想をも提供していたのである。ヘーゲルは、ここでシェリングが提示した「算術」の「図式」を「惑星」の太陽からの距離の比率を刻印した「線」に具体化し、「数列」に「ポテンツ」をつけた内容を、「付言」として書き込んだのであつた。そしてその仮説が、経験的な実

測の仮説によって批判的に検証されることによって、一方では、「感覚」の次元に根を下ろしている「数」が、「未知」な存在の発見を可能にすることを示して、カント的な「物自体」の不可認識性の壁を打ち破る強力な一つ的手段となることが示されたわけだし、他方ではまた、シェリング的な「直観」主義の危うさを克服するために、やがて『精神現象学』の始まりに示されているような「感覚的確實性」の検証から出発する自前の認識論を構築する道をさらに徹底していく必要が明らかになった。

以上見てきたように、ヘーゲルの第四テーゼは、一見して何の問題があるとも思えない外見の底に、多様な問題を潜ませていた。ギリシャ的な「数」の秘儀の検証、「自然哲学」の手段としての「数」と「数学」の位置づけ、そしてカント、フィヒテ、シェリングとの「哲学」的な差異化などなど。そしてそのすべての問題点が、その後のヘーゲル「哲学体系」の「自然哲学」的ならびに「認識論」的な徹底と前進をうながしていくのであった。

第五条 「磁気」問題の射程

Ut magnes est vectis naturalis, ita gravitatio planetarum in solem, pendulum naturale.

磁石が自然の槓桿 / 推進力となるので、その結果また、太陽に対する惑星の重力は自然の振り子となる。

(1) 第五条テーゼの表現していること

「自然哲学」関係の三つ目のこのテーゼも、比喩的な表現をとっているために、多義的な解釈を許すものようである。金子は、次のように訳している。

「磁石が自然の棒（テコ）であるごとく、惑星の太陽に及ぼす重力は自然の振り子である」⁷⁷。

そして金子は、このテーゼを、ローゼンクランツの説明にしたがって、後半の「太陽に及ぼす惑星の重力」とは、惑星が太陽の周囲を楕円軌道を描いて回転する際に描く「動径」のことだとしている。ただしローゼンクランツが「磁力」を「自然の槓桿」という表現で、「惑星」そのものの「内在的な運動」と軌道内での循環というその「有限運動」との区別を表現しようとしたのだらうという点には、異論を唱えている。前半は、「振り子」に対するものとして「磁石」が言われていることからすると、「槓桿」とはむしろ同極を斥け、異極は相引く「磁石」を棒磁石のようなものだと考えて、「自然の棒」としたのではないかと推測するのである⁷⁸。だが、ケプラーの法則によって「楕円運動」をする惑星のどこに「棒」のイメージが結びつくのだろうか？そもそもこの金子のイメージでは、ローゼンクランツが説明しようとしているように、「惑星」の自転をふくめた自己運動の原因については言及しないままになるのではないかと？

中埜は、ローゼンクランツの他に、ラッソンやヘーリングの意見も引きながら、「私はそのいずれの解釈を正しいとするかについての判断の基準をもちあわせていない」⁷⁹として、説明と判断を放棄した。

これに対して試訳は、むしろローゼンクランツの理解に近い形になる。ラテン語の接続詞「ut」は、多くの意味を持っていることはよく知られているが、ここでは、理由文を導くものと理解し、副詞「ita」がそれを受ける意味で、「その結果」と続ける文にしてみた。そうすると、前文は「磁石は、自然が惑星を動かす槓桿 / 推進力となっているので」、という意味になり、「磁石」は、ケプラーが想定したように、太陽が惑星に及ぼす遠隔力による動力のことだと考える。そうすると後半の文では、運動に駆られる「惑星」は、それ自身の「重力」を「太陽に及ぼす」ことで太陽の方に運動を曲げることで、ケプラーの法則にしたがった楕円軌道に入る、という受け方になる。「振り子」のイメージは、ケプラーの第二法則「面積速度一定の法則」に関連した扇形イメージからきたものか、もしくは楕円軌道を周回する惑星速度の遠点と近点の不均等な循環からイメージしたものであろう。そして「振り子」というイメージでは、「自然」そのものが一つの時計のように、惑星の周回によって時間そのものとその単位との客観性を保証する形になっていることを示して、カント的な時間の主観説を批判する含意も与えられているのかも知れない。

ともあれ、惑星の運動が太陽からの引力によって規定されていることは、当時すでにニュートンによって明らかにされていたことだった。だが、その「惑星に及ぼす太陽の引力」説に対して、「磁石 / 磁気」のもつ遠隔力のイメージを「重力」に重ねて、「惑星が太陽に及ぼす重力」という独自の解釈に立った視点を対向させているのがこのテーゼの特徴である。ニュートン自身が「重力の原因を指定すること」ができずに残している（ニュートン「一般的注解」、『自然哲学の数学的原因』）条件の下で——そして21世紀初頭の現在でもまだ「量子論」の枠組みのなかで「重力」の原因が究明できていない条件下にあるのだが——ヘーゲルは、「磁石 / 磁気」論の可能性のうちに「重力」の原因を求めようとしたのであった。ケプラーに対する少年時代からの愛好とゲーテを初めとする当時のドイツ論壇のニュートン批判とを、シェリングとともにヘーゲルも着目していた「磁石 / 磁気」の視点で組み合わせたこのテーゼは、自然科学的な問題に対するヘーゲルの積極的な介入の姿勢において、「教授資格論文」における天体観測問題に対するそれに共通するものをもっていた。

(2) シェリングの原理からヘーゲルの原理へ

ただここでの「磁石 / 磁気」にかかわるこのようなモチーフについては、1800年のシェリングの論文「力動的過程もしくは自然学のカテゴリーの一般的演繹」のなかで、すでに提示されていたものであるという、ザントキューラーによる指摘がある。そこでシェリングは、「磁気」の機能を凝集と解釈して、「物質」の「空間充満の第一のポテンツ」が高まり、「力動的過程」を含んだ「長さ」となるところで、「無限な拡張」と「数学的な点」との間を媒介し、両者を結合するのが「磁気」である、とする⁸⁰。このような「磁気」の空間的な位置づけの仕方が、「惑星」と「磁石」とを結びつける第五テーゼのイメージをヘーゲルに提供することになったと考えられる。

この「磁気 / 磁力 *magnes / Magnetismus*」は、ではヘーゲルの「哲学体系」そのものにど

のような意味をもっていたのか？「イエーナ期」の『自然哲学』の講義の中から、いくつかその意味を語る象徴的な事例を確認していきましょう。

「運動は、死んだ質量」のうちに、「死んだ質量を支配し、その中で、またそれから離れ去る」のだが、その「死んだ質量の規定の下に包括されたもの」として、「振り子と固体の槓桿」の段階——シェリング流に言えば「ポテンツ」——がある。この段階の一つに、ヘーゲルは「磁気あるいは凝集」を入れている⁸¹。

「物体」が「凝集性」を通して「単純」なものとなった時、そのうちに「分裂」を持ち込むのが「磁気」である。「磁気」は、「一つの方向」であり、両極を中点で統合するような「一／一つもの Eins として中性点である一体性 Einheit」であり、「質量一般の点としての重心である」⁸²。

そしてその結果、「磁気」は、「力が定在する運動」になることを止めて、「物質の主体存在」、ただしその「形式的定在」である「主体の第一次元」、つまり「線」となる。そして「地球が磁石」であり、「磁気は地球の全体的な普遍者」⁸³となる。

「死んだ質量」の内的な運動原理から、「物質の主体的定在」の原理への転換点としての「磁気」への変化。そしてその「磁気」は、「地球」そのものの「磁極」の問題となり、「凝集性」に関連して、さらに「ポテンツ」を高めて、「光」、「電気」等々とも連関するようになり、「無機物」に「有機性」を確保させて、やがては「生命的有機体」への推転の道を開いていく。

こうしてヘーゲルは、「磁石 / 磁力」の概念を大きな手がかりにして、シェリングの「哲学体系」を中から打ち破っていく初期的な過程に足を踏み出していく。ペトリによれば、ヘーゲルの「哲学体系」は、ニュートン批判を進めるゲーテの影響下で、さらにゲーテをも超えて展開していくという。

「彼は、レーマー Römer (1676 年) やブラドレイ Bradley (1729 年) による天体観測に基づいて、光速の有限性について知っていたし、それだからまた、光が運動を前提にしていることも知っていた。当時の経験的物理学は、この種の精確な運動については、それ以上のどんな証明も彼に提供できなかった。それで彼は、イエーナ期においてと同様、ベルリン期においても、もっぱら力を集中したのは、太陽系の複合的な運動と関係づけを重視しながら、光の特徴づけを体系的におこなうことであった。彼が記しているところでは、光とは、体系的な力学のもっとも複雑な段階でもあれば、また体系的な物理学のもっとも根本的な段階でもあった。」⁸⁴「彼は、光、磁気、電気のおいだにはもろもろの内的な繋がりがありそうだということを示唆している。もちろんこうしたことは、あまり強調するわけにはいかない。そうした繋がりが事実として現存していることの経験的な証明は、まだ手に入る状態にはなかったからである。けれども、彼がそうした内的な繋がりに注意を向けていたあれこれの仕方は、たしかに荒削りではあったけれども、後にマクスウエルのいろいろな洞察を正確に先取りしたものであったのではないか。われわれには、疑いもなく、そう見なすことを許されるように思えるのである」⁸⁴。

結びにかえて

以上、ヘーゲルの「討論テーゼ」のうちの「論理学」及び「自然哲学」にかかわる部分を検討してきたが、すでにその範囲でも、「イエーナ期」にヘーゲルの「哲学体系」のうちにはさまざまな要素が、多様な連関のなかで主題化されたり、批判的な克服の時を待ちながら、大きな転換を準備していることを、十分に見てとることができた。またそこには、訳解に関わる初歩的な問題から、そのそれぞれ論点がはらんでいるヘーゲル独自の位相のとらえ方の分岐があり、形而上学的な思弁の領域のなかで、意外に現実的な出口に開け、発展していく局面があった。第一条の「矛盾テーゼ」の場合には、それが「主観と客観との同一性」問題に具体化されていて、一つには、近代哲学全般における「哲学の根本問題」の定式化とその解決を準備するとともに、また認識論における「四肢構造」の方法の発見につながっていた。第二条では、「イデアリスムス」が「理念」問題を出発点にして現実的な哲学の「学的体系」を実現することで、「観念論」への根底的な批判を準備しており、何よりも「無限判断」には、その神秘化された形而上学的な外皮の下に、身体性的な問題を「媒語」にして、主観と客観との両端項の推論を成立させるヘーゲル的な弁証法の秘密が潜んでいた。第三条も、その魔術的な言語の外観のもとで語り明かそうとしていたのは、ヘーゲル的な哲学体系の動的で実践的な構想であった。その構想で必然化されている「自然哲学」のために、第三条では「数学」的な方法の初歩的な現実性を確認し、第五条では太陽系に物理学的な方法の哲学的・思想史的な意味を探ろうとしているが、それはヘーゲルの「自然哲学」が自然諸科学への大胆な哲学的な介入を果たし、そこで自らを鍛えようとする決意をこめたものであることを証示することにもなっていた。

ここでは取り上げることができなかつたが、第六条のテーゼは、すでに「イデアリスムス」とか、「純推理根の直観」とかを巡る論議でも問題化した「理念 Idea」という言葉があらためて主題化されているが、「Idea」は古典ラテン語に固有なものではなくてギリシャ語からの転用であり、他方ヘーゲルに特有な「概念 Begriff」に相当するラテン語はない。だからテーゼの文脈で「理念 / 概念 Idea」の訳語の振幅をどう取るかで、これはこれでまた、ヘーゲル哲学そのもの「イエーナ期」の段階の意味づけにおいて大きな差異を生むことになりそうである。

以下の諸テーゼについても、「イエーナ期」のヘーゲルが改めて再評価の対象として浮かび上がろうとしている今日のヘーゲル研究段階⁶⁵で、立ち入って検討すべき論点が多々あることが十分に予測されるけれども、そこに立ち入るには、何よりもすでに許された紙幅を大きく越えてしまっている。またその場合の論点のいずれも、ここでのように総体的な論題に乗せるよりも、むしろ各論的に適宜に論じた方がより具体的な論脈を明らかにできるとも考えられるので、残された諸テーゼについての試訳を先に掲げたままに残しておいて、それらの訳解をはじめとする委細については、改めて別に論ずる機会を俟つことにしたい。

註

- 1 イェーナ大学哲学教授ウルリッヒの出願承認書への文言. G. W. F. Hegel, „Gesammelte Werke (以下 GW と略記) 4, Anhang, S. 524.
- 2 Walter Jaeschke, *Hegel, Handbuch*, J. B. Metzler, 2003, S. 106.
- 3 ヘーゲルの教授資格取得に際しては、論文の内容上も観測事実に反しているという問題があったし、三人の正教授と二人の員外教授の他に、やがて私講師が 7 人になり、収入を聴講料だけに頼る私講師間での序列の争いがあるところで、ヘーゲルが受講料無料の講義を予告したことも問題になった。そうした資格取得にかかわる経緯や友人・ゲーテの支えについては、ホルスト・アルトハウス/山本尤訳『ヘーゲル伝』、法政大学出版局、1999 年、144-153 ページを参照。
- 4 「イェーナ期」のヘーゲルの残したアフォリズムのなかに、「朝早く新聞を読むことは一種の現実的な朝の祈りである」というものがあるが、その新聞の一つフリーメーソン系の『ミネルヴァ』紙によって、ヘーゲルは海外植民地の事情にも通じていた。彼が、「人倫の体系」(1802 年)で「奴隷主」の「奴隷」に対する従属を「承認」の欠如として説明する時には、フランスの西インド諸島統治のために作った「黒人法典 Code Noir」(1685 年)が念頭にあったし、『精神現象学』で、「主と奴隷」との関係が「生と死を賭ける闘争」を通じて「自由」の承認に至ると説く経過には、1804 年に実現したハイチの黒人奴隷の独立革命が意識されていた。そしてその際ナポレオンは、「黒人法」の復活を試みようとして、現地にフランス軍を送ったが、そのなかからは「ラ・マルセユ」を歌う現地軍に同調するものも現われて、その軍事的な干渉は最終的には敗北することになる (Susan Buck-Morss, *HEGEL, HAITI, and Universal History*, UNIVERSITY OF PITTSBURGH PRESS. 2009, p. 42, pp. 53-54, p. 75). そこでヘーゲルの論ずる「主と奴隷」の関係をギリシャ・ローマ的な奴隷制の範囲に限定したり、「承認」論を、資本主義的な「契約」論で捉えたりすることは、彼の「イェーナ期」の哲学に提起されていた時代の焦点を見失っているのである。こうしたヘーゲルの時代感覚は、ギリシャのようやく始まろうとする独立闘争を主題にしてヘルダーリンが『ヒュペリオン』(1797-99 年)を書き、シラーがスイス独立を主題とした作品『ヴィルヘルム・テル』を 1804 年、まさにハイチ独立の年に出版したことに通底している。
- 5 Hegel, *THESS*, GW 5, SS. 227-228. 対訳は、文脈や用語の問題も考えて、拙訳によった。ここに限らず他の場合の翻訳においてもそうだが、行論の必要上、引用した訳文は当該の既訳に必ずしも一致するとは限らない場合がある。「討論テーゼ」の翻訳としては、ローゼンクランツ K. Rosenkranz / 中埜肇訳『ヘーゲル伝』みすず書房、1983 年、148-151 ページがあり、またその訳者中埜肇が、別訳を試み、独自に検討をくわえた仕事がある (『ヘーゲル哲学の基本構造』【以下、引用に当たっては「基本構造」と略称】、以文社、1973 年、312-323 ページ)。なお、金子武蔵「ヘーゲルの就職テーゼ」は、ヘーゲルのラテン語訳の他に、ラッソンによる独訳も掲載している (『精神の現象学への道』【以下、引用に当たっては「道」と略称】岩波書店、1989 年)。本稿は、以下の行論から明らかになるように、何よりもこれらの先行研究に多くを負ったものである。
- 6 ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』、上掲書、1401 ページ。
- 7 H. Glockner, *Hegel, Zweiter Band*, "Hegel Sämtliche Werke", Bd. 22, S. 240. ここでの訳は、上掲、中埜『基本構造』、312 ページを利用した。ただし引用されているグロックナーのここでのヘーゲル哲学の「矛盾」の理解には、第二次世界大戦中に「闘争は万物の父」というスローガンでヒトラーに結びつけるような弱点がグロックナーにあったことを忘れてはならない。そのことが、ヘーゲルがカントの『永遠平和のために』の国際平和論の実現可能性に批判的であったことを結びつけて、ヘーゲルを近代史の世界史的な「支配的民族」正当化論者と見る意見が今日もなお散見するが、そうした論者たちは一様に、ヘーゲル哲学の「イェーナ期」から「ベルリン期」へかけての時期のドイツが、まだ国民国家の形成を完了していない段階にあったことを見落としている。1818 年のドイツ連邦内には 38 種類の関税 (プロイセン国内にも 67 の関税) があり、ようやく 1871 年になって、4 つの王国と 5 つの大公国、13 の公国や侯国、3 つの自由都市がプロシヤの指導下に一つの帝国 (Reich) にまとめ

られ、統一的な訴訟手続・通貨・行政の施行をみることになったのである（トマス・リハ／原田他訳『ドイツ政治経済史』ミネルヴァ書房、1992年、93-94ページ参照）。ドイツだけではない、当時は、ポーランド、ハンガリーからバルカン半島にかけての地域の諸国も、民族国家形成の途上にあつた上に、註4にも指摘したように、武力による植民地の独立闘争と奴隷の解放がすでに課題になっていて、アフリカ大陸にもその動きは拡大しようとしていた。19世紀前半の「帝国主義」前の時期の国際史的な段階では、国家的な独立や植民地制度の解放を実力によって獲得するという前提なしには、国際的な平和機構を創設することは理想ではありえても、それを実現する現実的な可能性はなかった。近代史のなかでの植民地の解放問題の重要性を見落とすなら、「先住民」の抹殺や「奴隷制度」に対する植民地帝国の原罪を克服する課題が、21世紀の今日、「アメリカン・ドリーム」やフランス「共和主義」のイデオロギー性に対して、どうしてあらためて厳しく突きつけられるようになってきているのか、その歴史の意味を理解できなくなってしまうであろう（藤永茂『アメリカン・ドリームという悪夢』三交社、2009年、平野千果子「フランスにおけるポストコロナリズムと共和主義」『思想』2010年9月号などを参照）。

- 8 Hegel, *Systemfragment von 1800*, Hegel Werke 1, Suhlkamp, S. 422. / 金子, 『道』, 16 ページ.
- 9 Hegel, *ibid.*, S. 420.
- 10 Hegel, *Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus*, *ibid.*, S. 234.
- 11 Hegel, *ibid.*, SS. 231-232.
- 12 Hegel, *ibid.*, S. 236. この「最古の体系計画」は、便宜的に用いられている表題にも影響されて、ヘーゲルとシェリングとの「体系」論の観点からいつも問題にされてきているが、ここでの全体の論述の重点は、「精神哲学は美学的／感性的哲学 eine ästhetische Philosophie である」という言葉に表現されていることが忘れられている。宗教やイデオロギー的な疎外のない「あらゆる精神的存在の絶対的な自由 absolute Freiheit aller Geister」を実現することが、「自然」に対する「感性／感覚」の全面的な覚醒と展開を可能にし、その「感性」の人民的な陶冶という課題が、人民と哲学との一体性という問題意識に開けていく、というのがヘーゲルの議論の基調におかれていることなのである。このような「自然」と解放された「感性」とによる人間の自由の新しい可能性に、「学」の「体系」を据えるという主張は、すでにカントが『純粹理性批判』の第二版の扉にヴェルラムのベーコンの言葉——「われわれの意図するところは、一学派の創設や任意な学説の確立ではなくて、実に人類の広大な福祉の建設にある」——を掲げているように、近代哲学の最大の課題でもあった。この系譜の上に、やがて若いマルクスが書く——フォイエルバッハのいうように、「感性」から、したがって「自然」から出発する場合にのみ、「学問は現実的な学問」であり、「自然科学」はやがて「人間にかんする学問」と相互に包摂し合って、「一つの学問／学的な体系 eine Wissenschaft」が存在することになる（マルクス『経済学・哲学手稿』、『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻、465ページ）。
- 13 Shelling, *System des transzendentalen Idealismus*, Schellings Werke 2, von M. Schröter, S. 339.
- 14 *Ibid.*, SS. 340-341.
- 15 とくにフィヒテからシェリング宛での1800年11月15日、シェリングからフィヒテ宛の1800年11月19日、フィヒテからシェリング宛の1800年12月27日手紙を参照（ワルター・シュルツ解説／座小田・後藤訳『フィヒテ - シェリング往復書簡』, 法政大学出版局, 119-137ページ）。
- 16 ラインホルト「シェリング『超越論的観念論の体系』の批評」, 寄川条路編訳『初期ヘーゲル哲学の軌跡』, ナカニシヤ出版, 134ページ。
- 17 「討論テーゼ」をめぐる討論内容を知りうる資料は、残っていないようであるが、討論に先立って、慣例上ヘーゲルが討論者に謝辞を述べるために、事前に準備したラテン語のメモが残されている。古典的なラテン語の形式をはみ出した過剰な敬意と謝辞を連ねた表現のなかに、手続き上反対討論に回ったシェリング、ニートハンマー、学生のシュヴァルツットのそれぞれに宛てて、「貴殿にとっては同意できないもの non probantur」があることを認め、「好意を欠いている同世代の者たち coevum, minus amici」があると洩らしている個所（Zur Dissertazion, GW 5, S. 229）がある。こうした事情

は、すでにどのテーゼとは特定できないが、ともあれいくつかのテーゼをめぐってシェリングなどとの実質的な意見の違いがあった可能性を暗示しているのではなからうか。

- 18 エンゲルスは、ヘーゲルのいう「主観と客観との同一性」の問題を、「思考と存在の関係」、「精神と自然の関係」の問題という言葉でもって受けとめて、次のようにその歴史的な成立の過程を説明している。「すべての哲学、とくに近代の哲学の大きな根本問題は、思考と存在との関係を問うものであった。……人類は、まだ自分の身体の構造について全く未知であったきわめて古い時代には、夢の諸現象によって刺激されて、自分たちの思考や感覚が自分たちの身体の活動ではなくて、ある特別な、身体のうちに住んでいるけれども、死の際には、身体を棄て去っていく靈魂の活動であると考えようになった。……靈魂の不死という表象が生まれたのも、宗教的な慰さめの必要からではなくて、同じように一般的な知識の狭さのために、この靈魂をどう扱ってよいものか、当惑するより他になかったからであった。まったく同様にして、自然の諸力を擬人化することで最初の神々が生まれ……多くのたがいに限定しあっていた神々から、一神教的な諸宗教の唯一神という表象が人間たちの頭のなかに成立する。したがって思考と存在との、精神と自然との関係を問う問題は、あらゆる哲学の最高の問題であるが、その根源を、すべての宗教におとらず、野蛮な状態での偏狭で無知なもろもろの表象のうちにもっている。けれどもその問題が完全に鮮明な仕方ではじめて設定され、その問題の意味がはじめて獲得されることができたのは、ヨーロッパの人間たちがキリスト教中世の長い冬眠から醒めた時であった。思考の存在にたいする位置づけに関わる問題は、中世のスコラ哲学においてもまた、いまひとつ、いったい本源的なものとは、精神であるのか、自然なのか？という問題として、大きな役割を演じたのであった。——この問題は、教会に対しては、神が世界を創造したのか、それとも世界は永遠の昔から存在し続けているのか？という問題にまで先鋭化して行った。」(エンゲルス「ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」、MEW 21, S. 274-275)。

ここに言われているような「夢」や「神」にかかわる諸問題は、カント哲学以降のドイツ哲学の発展のなかで繰り返し哲学的な問題として取り上げられることで、「主観と客観との同一性」問題となり、その結果として、「精神と自然の関係」の問題は、「哲学体系」の「根本問題」となっていく。ただし、上の文に続けてエンゲルスは、ヘーゲルの場合には、「世界」を「永遠の昔から、世界から独立に、世界以前に、どこかに存在していたという絶対的理念の段階的な実現として仕立てる」(ibid. S. 276)と書いている。このような理解は、ヘーゲルの「絶対理念」について広く共有されているものではあるけれども、後にヘーゲルの「四肢構造」的な認識方法や、キンマーレの「純粹理念」問題に関して言及しておいたように、「ヘーゲル体系」を固定したものと解釈して、運動として捉えないうところから生ずるまったくの誤解である。およそ「認識」は何らかの「仮説的な理念」から出発して、「実存」において具体的な認識活動を通して「検証」を受けることで「確実性」と「科学性」を確保するものであることは、ヘーゲル自身がすでに「イェーナ期」に明言していることなのである。

- 19 カント「形而上学の夢によって解明された視霊者の夢」、1776年、『カント全集』第三巻、理想社、195ページ、Kant, *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik*, Kants Werke, Akademische Textausgabe, , SS. 370-371.
- 20 カント「可感界と可想界との形式と原理」、同上書、266ページ、ibid., SS. 417-418.
- 21 ヘーゲル/山口・星野・山田訳『理性の復権 フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』批評社(以下、「差異」)、4-5ページ、GW 4, S. 6.
- 22 同上書、6ページ、ibid., S.7.
- 23 同上書、17ページ、ibid., SS. 13-14.
- 24 同上書、103ページ、ibid. S. 66.
- 25 同上書、106ページ、ibid. S. 67. 引用文中に、【 】で示したのは、前後の文意をしめすための筆者による補訳。以下も同様である。
- 26 同上書、148ページ、ibid. S. 92.
- 27 ヘーゲル/榎山欣四郎訳『精神現象学』上、平凡社(以下、『精神現象学』)、111ページ、Hegel, *Ph*

änomenologie des Geistes, GW 9, S. 58. 引用中に「他のものに対する / 開かれた存在 dies Sein für ein aderes」や「自体 / 本体的な存在 das an sich Sein」のように「/」で重複した意味をもつ語を表記した。この時点までのそれぞれのヘーゲルの語法は、けっして一義的ではなく、柔軟で、かなり振幅が多いことに留意しておく必要がある。「他のものに対する / 開かれた für ein aderes」は、能動的に「他のものに対する」場合も、受動的に「他のものにかかれた」場合もあり、共にその用例も多い。また「an sich」は、「即自的」という頻用される訳語が、初期の著作以来のヘーゲルのこの語法も、きわめて振幅が大きく、「未発な」、「初発的 / 初期的な」、「本有的な」、「本体的な」などと、そのたびに意味を文脈によって見極めるようにしなければならぬ難語の一つである。「自体」という訳語も使えないこともないが、他のものとの関係なしにそれ自体を取り上げればというニュアンスであり、自立性の意味の強い「selbst」の「自体」からは区別するために、「本体的な」という表記をこの段階では選んだ。

- 28 同上書, 111-112 ページ, *ibid.*, S. 58. ここでも引用中に「本当のもの / 真理 die Wahrheit」という重複訳語を用いた。『精神現象学』を読めば明らかのように、「感覚」や「知覚」の確実性が問題になる局面では、確実性の尺度となっているのは、「本当のもの das Whare」であり、「悟性」から「理性」の段階で、はじめて「真理 die Wahrheit」が本来的な意味で問題になる。一語で「die Wahrheit」と言われていれば、当然に、「感覚」段階から「理性」段階までの意味上の振幅があるのである。
- 29 同上書, 111 ページ, *ibid.*, S. 58. 引用中に、「本質的存在 / 本質 das Wesen」という重複訳語を用いたのも、前註における「die Wahrheit」の場合と同じく、認識の段階の違いによる意味変化があるからである。またこの引用文中に、「検証」の「尺度」問題が出てくるが、ヘーゲルが現実的な「尺度」を取り上げていることには、重要な意味があった。ラインホルトがシェリングの『超越的観念論の体系』に向けた批判には、ヘーゲルの直観主義的な「並行主義」に対して、「同一性」が構造的・重層的な経過によって確保されるものであることについての適切な指摘が含まれていた。そのうえでラインホルトは、「客観的なものと主観的なもの」との「同一」ではなく、「分離」を結論して、シェリングの批判とするが、ヘーゲルの場合には、その認識過程に「検証」の現実的「尺度」を組み込むことで、シェリングの「同一性」論に弁証法的な転換と発展の展望を開くことになっているのである（この点は、さらに展開を要する論点であるが、さしあたりは、ラインホルト「シェリング『超越的観念論の体系』の批評」の第三節の冒頭を参照、上掲書, 120-121 ページ）。
- 30 同上書, 111 ページ, *ibid.*, S. 58.
- 31 Schelling, *System des transzendentalen Idealismus.*, *ibid.*, S. 331.
- 32 ヘーゲル『精神現象学』, 上掲書, 31 ページ, *ibid.*, S. 17.
- 33 ヘーゲルが『精神現象学』の出発点で「自然的意識」の担い手として想定しているのは、イギリスの産業革命以降の資本主義の発展のなかで生み出され、フランス革命における「人権宣言」を通じて法的に正統性が確認されたブルジョワ的個人であった。「現代が誕生の時代」として、「自己意識」を生み出すところに、「実体」が「主体」となるべき秘密があることを、ヘーゲルの『精神現象学』の「序論」は十分に語っている。
- 34 「差異」論文の中でヘーゲルは、現実の世界に対して、思考するものと思考されるものとの世界という「分裂」を持ち込んだ「北西部ヨーロッパ」の「省察の形態」に言及（『差異』, 上掲書, 18 ページ）しているが、その「省察」とは、たんに「思考」の絶対的確定性を主張しただけの『方法序説』のデカルトのものではなくて、「自我」の確定性から「感性的世界」の確定性を検証にかけていき、形而上学、自然学、その他諸々の学問体系への展開の可能性をはらんだ『哲学原理』のデカルトのものをさしていた。また別の場所では、ラインホルトに対してドルバック『自然の体系』の唯物論にも言及し、「その時代に困惑し、学において自己を再生産しようとする精神」と「時代に充満する欺瞞、自然の底知れぬ破壊、真理や正義を自称する果てしなき偽りをめぐる痛恨の情、こうした嘆きが全体にみなぎっている」のを「否認するわけにはいかない」と書いている（同上書, 127 ページ）。
- 35 ヘーゲルの死後、ヘーゲルの妻マリー宛に妹のクリスティアーネが兄の思い出を綴って出した手紙の

なかに、ヘーゲルの自然科学への関心の強さを示す記述がある。それによると、大学時代にヘーゲルは一時重い病気にかかって休学していた折にも、植物学の勉強をしたり、チュービンゲンの解剖学教室を訪れたりしていた。またギムナジウム時代から物理学が好きだった。ヘーゲルが同郷の先輩コペルニクスに深い関心を早くから寄せていたことは、友人への手紙や、ギムナジウム時代の『日記』からも分かる（いずれも F. Nicolin, *Der junge Hegel in Stuttgart*, Marbacher Schriften, 1970 年に所収。近く翻訳出版を予定している）。こうして「イエーナ期」には、シェリングを介して、ゲーテの生命的自然観に直接的に触れる機会が多くなり、シェリングの「自然哲学」をさらに乗り越える条件が強まったが、この点については別に立ち入って論じなければならない（ゲーテ／高橋義人編訳『自然と象徴—自然科学論集—』富山房百科文庫は、その序詩「神と世界」のなかに、シェリングとヘーゲルの「自然哲学」に言及した詩をいくつか載せている）。またヘーゲルの「市民社会」・「国家」論については、1979年のスチュアート『経済学』の独訳に対する注解のことがローゼンクランツ『伝記』（邦訳 86 ページ）によって伝えられており、そこで得た「国家経済学」的知見に加えて、「イエーナ期」には「精神哲学」の講義や「人倫の体系」・「イエーナ実在哲学」などにみるようなアダム・スミスの「国民経済学」の批判的な摂取を続ける。こうしてヘーゲルは、「官房経済学の国家的編成に対抗して、またイギリス政治経済学の、私的な財産処分権にもとづいた自由な市場による配分 (freie Marktalloation) に対抗」して、「コルポラツィオン Korporation においてこれらの二つの要素を統一する、経済体制の第三のバリエーションを提起」することになる。そこでは、「市場経済の自立的な圏の近代的承認」が、「国家」によって代表される「共同精神 Gemeininn」をそなえた人倫の優位の下への、市場経済の古い従属と同時に現われる」と、プリッタードという (B. P. プリッタード／高柳他訳『経済学者ヘーゲル』お茶の水書房, 1999 年, 11 ページ)。だがここでの「市場の従属」を「古い」というのは根本的に理解を誤っている。ヘーゲル自身の見解では、ここで問題になる「市民社会」とは、「個人を家族的な絆から引き離し、家族員相互の仲を離間させ、そして彼らを独立の人格として認める」のだが、他方では、「個々人が自分の生計の資を得ていた外的な非有機的自然である父祖伝来の土地の代わりに、市民社会自身の基盤をおき、家族全体の存立をさえも市民社会に依存させ、偶然性に支配されるものになっている」(ヘーゲル／藤野・赤沢訳『法哲学』中央公論社, 1967 年, §238) ような、まったく新しい段階に立ち至っているのである。したがってこの段階での「市民社会」の統治は、「国家」を構成するコルポラツィオン諸階層の新しい「共同精神」による新しい「福祉施策 Polizei」を軸とすることになるのであって、当然官房学的な夜警国家におけるような「警察行政」でありうるわけではない。だからここでは「自己意識」をもった「個人」の「教育」は、その「生計」についてと同様に、「市民社会」が「後見」し、「養育」する義務を負うことで、「鞭撻」の権利を負う (§239) のであり、とりわけ「貧困」は、或る階級に加えられる「不法」と見なされ、これを取り除くことが近代社会の重大問題 (§244 補遺) である。また「市民社会」の発展で「植民地」問題が必然化するが、それについては、その「解放がそれ自身本国にとっての最大の利益」であることは、「奴隷の解放が主人にとって最大の利益であることが証明されるのと同様」とされる (§248 補遺)。このように、ヘーゲル的な意味での「市場」の「国家」的な倫理共同体への「従属」は、官房経済学のうちに国民経済学を取り込むような「古さ」によってではなく、両者をともに乗り越えた第三の「福祉社会・国家体制」の創出を展望しようとする「新しさ」によってこそ特徴づけられているのである。

36 ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』, 上掲書, 149-150 ページ。

37 金子『道』, 上掲書, 18 ページ。

38 同上書, 18-20 ページ。

39 金子が、ホフマイスターの考証にしたがって 1801-02 年冬学期のものとするヘーゲル「論理学 - 形而上学」は、現在では、1804-05 年のものとされている。ともあれ、「イエーナ期」の「概念 - 判断 - 推理」の連関に着目しながら、そのいくら立ち入った内容については、『エンチュクロペディー』第 161 節によって説明をするというのは、奇妙である。実は「判断」の「実在化 Realisierung」を通し

- て、「判断」から「推論」への推転が起こることについての説明なら、「論理学・形而上学」そのものの「推論」の項で十分に展開されていたはずである（田辺振太郎訳『ヘーゲル 論理学・形而上学』未来社、1971年、177-196ページ、Hegel, *Metaphysik, Logik, Naturphilosophie*, GW 7, SS. 94-105. ただしこの邦訳はほとんど利用に耐えないし、その巻末のラッソンの解説も書き改める必要がある）。
- 40 中埜『基本構造』, 上掲書, 313ページ.
- 41 金子『道』, 上掲書, 19ページ.
- 42 中埜『基本構造』, 上掲書, 313-314ページ.
- 43 ヘーゲル「絶対的存在本質の理念^{ママ}...」, GW 5. SS. 263-264.
- 44 たとえば「玄武岩」は、多様な形状の「花崗岩」を他の状態の素材とともに自由に含み込むことで、固体性を一般的な状態にしている、すでに「有機的なものの基盤」となっている（本多修郎訳『ヘーゲル自然哲学』上, 未来社, 236ページ参照）.
- 45 ゲーテ/高橋健二訳『ファウスト』, 世界文学全集2, 河出書房新社, 254ページ. そこでファウストは、「瞬間 Augenblick に向かって、「とどまれ、お前は実に美しい!」という。だがまさに「時」の歩みをとどめようとしたその「瞬間」に、「きみはわしを縛り上げてよい。その時はわしは喜んで亡びよう」と、生き甲斐を賭けてメフィストと結んでいたかねての契約が成就されなければならなかった.
- 46 ヘーゲル『精神現象学』, 上掲書, 392-393ページ, GW 9, S. 191.
- 47 金子『道』, 上掲書, 20ページ
- 48 イポリット/市倉宏祐訳『ヘーゲル精神学の生成と構造』上巻, 岩波書店, 1972年, 366ページ.
- 49 ヘーゲル『精神現象学』, 上掲書, 43ページ, *ibid.*, S. 24. ヘーゲルの『精神現象学』の「四肢構造」的な認識方法も、じつは、そのような問題の構造の所在を提起したのはシェリング「自然哲学に課する考案 序説」(1797年)であった。そこではライブニッツ問題が、スピノザのそれと関連して提起されている。この問題提起は、さらにラインホルトによる「シェリング『超越論的観念論の体系の批評』介して、ヘーゲルによってさらに徹底的な仕上げを受けることになったのだが、その際にシェリングからのヘーゲルの「差異」化の決定的なポイントが、上に見てきた「無限判断」のヘーゲル的な解決であった。「四肢構造」にかかわるこの論点の委細については、別稿に委ねなければならない。
- 50 ヘーゲル『精神現象学』, 上掲書, 270-271ページ, GW 9, S. 133.
- 51 同上書, 273-274ページ, *ibid.*, S. 134-135.
- 52 同上書, 274ページ, *ibid.*, S. 136.
- 53 同上書, 275ページ, *ibid.*, S. 137.
- 54 ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』, 上掲書, 150ページ.
- 55 松山寿一『ドイツ自然哲学と近代科学』北樹出版, 1992, 177-178ページ及び189ページ註(5)参照.
- 56 金子『道』, 上掲書, 22-23ページ.
- 57 Heinz Kimmerle, *Hegel, s Naturphilosophie in Jena*, Hegel Studien, Beiheft 20, Bouvier Verlag, 1980, S. 209.
- 58 *Ibid.*, S. 211.
- 59 ヘーゲル『論理学・形而上学』, 上掲書, 337ページ, *ibid.*, S. 176. ヘーゲルは、このように、「絶対精神」への「認識」の到達が、また新しい出発への展開となることを論ずる局面で、「das An sich sein」という用語について、次のような興味深い用法を示している。「認識活動は、das An sich seinとなっている。認識は、内的には完結した活動となり、絶対的精神の形を取って、実現されている」(GW 7, S. 165). この局面では、「絶対精神」は自分の「本然のありかた das An sich sein」を実現しているが、それはまた次の運動に向かう出発点の局面でもあるのだから、それがそのまま「未然なありかた das An sich sein」でもある。つまりここでの「das An sich sein」は、このように「本然の/未然のありかた」という二重化した動性を表現する特別な表現になっているのである。
- 60 同上書, 338ページ, *ibid.*, S. 177.

- 61 H. Kimmerle, *ibid.*, S. 210, Fußnot 9.
- 62 ヘーゲル / 上妻精訳 『信仰と知』 岩波書店, 16 ページ, Hegel, *Glauben und Wissen*, GW 4, SS. 322-323.
- 63 ヘーゲル 『論理学・形而上学』 上掲書, 268 ページ, *ibid.*, S. 126.
- 64 ヘーゲル 『精神現象学』, 上掲書, 50 ページ, GW 9, SS. 28-29.
- 65 金子 『道』, 上掲書, 9-10 ページ.
- 66 中埜 『基本構造』, 上掲書, 315 ページ. 中埜による第四テーゼの翻訳は, 以下の通りである. 「真なる算術にては, 一を二に加うるほかに加法はなく, 三より二を引くほかに減法はなし. また三は和と考うべからず, 一は差と考うべからず. この訳は, 金子と同じく数字をすべて基数と考えてしまった誤りが, ラッソン訳に直訳的に適用されたことによって出来上がったものである. 後半の「和」と「差」についての訳は, 「三」と「一」を基数としてラッソン訳を読んでいるところは, 金子がそこで勝手な読みこみをしたのとは違っている. もちろん, 中埜がヘーゲルを神秘主義者扱いにするのはまったく不当である.
- 67 ヘーゲル 『精神現象学』, 上掲書, 271 ページ, *ibid.*, S. 133.
- 68 同上書, 59 ページ, *ibid.*, S. 32.
- 69 同上書, 62 ページ, *ibid.*, S. 34.
- 70 ヘーゲル / 村上恭一訳 『惑星軌道論』 法政大学出版局, 1991 年, Hegel, *De orbitis planetarum*, GW 5, S. 252.
- 71 ローゼンクランツ 『ヘーゲル伝』, 上掲書, 146 ページ.
- 72 ヘーゲル 『惑星軌道論』 上掲書, 1991 年, 64-65 ページ, *ibid.*, GW 5, S. 252.
- 73 プラトン / 種山恭子訳 『ティマイオス』, 『プラトン全集』 12, 岩波書店, 42 ページ. テイマイオスは, この「級数」を使って, さらに「調和中項」, 「算術中和」の複雑な計算を通して, 月, 水星, 金星, 火星, 木星, 土星の他に, 太陽も含むと考えられていた七つの惑星の不等な円運動を導き, 七つの惑星の軌道に対応させていた. ヘーゲルの当時は, 太陽系の惑星としては, 上記のうち太陽と月以外の五つの惑星の他, 天王星, 海王星を加えた七つが知られていた, 新たに知られた「ケレス」は小惑星で, 以後小惑星の発見が相次ぐことになった.
- 74 ローゼンクランツ 『ヘーゲル伝』, 同上書, 147 ページ.
- 75 「フィヒテからシェリングへの手紙」, 1800 年 11 月 15 日付, W・シュルツ / 座小田・後藤訳 『フィヒテ-シェリング往復書簡』, 法政大学出版局, 1990 年, 122 ページ.
- 76 「シェリングからフィヒテへ」, 1800 年 11 月 19 日付, 同上書, 125 ページおよび 130-131 ページ.
- 77 金子 『道』, 上掲書, 10 ページ.
- 78 同上書, 28-29 ページ.
- 79 中埜 『基本構造』, 上掲書, 315-316 ページ.
- 80 H・J・ザントキューラー / 松山壽一訳 『シェリング哲学』 昭和堂, 2006 年, 152 ページ.
- 81 ヘーゲルの 1804-1806 年の冬学期の講義 / 本多修郎訳 『ヘーゲル自然哲学』 上, 未来社, 1973 年, 285-286 ページ.
- 82 ヘーゲルの 1805-1806 年の冬学期の講義 / 本多修郎訳 『ヘーゲル自然哲学』 下, 未来社, 1984 年, 102 ページ, *ibid.*, S. 52.
- 83 同上書, 103 ページ, *ibid.*, S. 53.
- 84 Michael Johan Petry, *Hegel's Vertreibung von Goethes Farbenlehre gegenüber Newton*, in Hegel und die Naturwissenschaften, Frommann-Holzboog, 1987, S. 339.
- 85 たとえば 2009 年の日本ヘーゲル学会の報告集には, 次のような見解が掲載されている. 「ベルリンはヘーゲルの思想の完成期ではない. ベルリンのヘーゲルは (1818-1831 年) はイエーナのヘーゲルの拙劣で平板な模倣者だった.」(加藤尚武「ヘーゲル体系論の四つのモチーフ」, 久保陽一編『ヘーゲル体系の見直し』理想社, 2010 年, 16 ページ). このようなヘーゲル哲学の「イエーナ期」と「ベ

ルリン期」とへの二分法的評価の当否は別にして、「イエーナ期」が今日もう一度見直されて然るべきそれ独自の重要性をもっていることは間違いないであろう。